

新庄中核工業団地関連遺跡 発掘調査報告書

1981

山形県
山形県教育委員会

福 田 山 A 遺 跡
福 田 山 B 遺 跡
仁 間 磯 ノ 沢 B 遺 跡

発掘調査報告書

昭和 56 年 3 月

序

本報告書は、山形県教育委員会が昭和55年度に実施した、新庄中核工業団地造成予定地にかかる3遺跡の調査結果をまとめたものであります。

5月初旬から4ヶ月におよぶ発掘調査により、縄文時代の住居跡をはじめ弥生時代や近世の墓塚など注目される生活跡が発掘され、先人の歴史をたどる貴重な手がかりを得ることができました。

新庄市福田に計画された新庄中核工業団地は、最上地域における「開発の拠点」として住民の経済・福祉の向上を目的としたものであり、この地方の振興のために大きな意義をもつてあります。

近年、これらの大規模な開発と埋蔵文化とのかかわりが、とみに増加の傾向を示しており、地域住民の生活向上を願いとする諸開発事業と、幾千年を経た先人の足跡でもある埋蔵文化財の保護との調整については、県教育委員会においても鋭意努力を続いているところであります。

本報告書が、県民の皆さんに十分活用され、埋蔵文化に対する理解の一助になれば幸いと存じます。

最後に調査にご協力をいただいた新庄市教育委員会並びに関係各位に、心から感謝を申し上げます。

昭和56年3月

山形県教育委員会

教育長 大竹 正治

例　　言

1 本報告は、山形県教育委員会が昭和55年度に実施した、新庄中核工業団地造成工事に係る福田山A遺跡・福田山B遺跡・仁間磯ノ沢B遺跡の発掘調査報告書である。調査期間は、3遺跡を通し、昭和55年5月7日から同年9月5日までの実質80日間である。

2 調査にあたっては、山形県開発局企業立地課・新庄市教育委員会・同市開発室並びに地域振興整備公団などの諸関係機関の協力を得た。記して感謝を申し上げる。

3 調査体制は下記の通りである。

調査主体 山形県教育委員会

調査担当者 主任調査員：佐々木洋治 現場主任：佐藤庄一 調査員：名和達朗

〔山形県教育庁文化課〕

事務局 事務局長：浜田清明 〔山形県教育庁文化課課長〕

事務局長補佐：荻野和夫 〔山形県教育庁文化課課長補佐〕

事務局員：設楽周一郎 田内糸子 布施厚子 〔山形県教育庁文化課〕

4 挿図縮尺は、遺構については60分の1を基本とし、遺物については大形の磨製石器を4分の1としそれ以外は2分の1を基本とした。さらに各挿図それぞれに、スケールを示した。また遺物の写真図版については、3分の2を基本としている。

挿図中の記号は、S T—住居跡・S K—土壙・E P—柱穴・S D—溝跡・S X—性格不明遺構とし、各遺跡ごとに一連番号を付した。

5 本報告書の作成は、佐藤庄一が担当、執筆した。全体については佐々木洋治が総括し編集については名和達朗があたった。

挿図・図版の作成にあたっては、太田八重子・津留房子・黒金佳子・高橋貴恵子・佐藤隆子・池田洋子・鏡克子・吉田史子・松沢美保子・奥山厚子・山口由紀子がこれを補助した。

目 次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経過	1
2 調査の経過	3
II 遺跡の概観	
1 遺跡の立地と環境	5
III 福田山 A 遺跡	
1 調査の経過	8
2 遺跡の層序	8
3 遺構・遺物の分布	10
4 発見された遺構	12
5 出土した遺物	22
IV 福田山 B 遺跡	
1 調査の経過	26
2 遺跡の層序	26
3 発見された遺構	28
4 出土した遺物	29
V 仁間磯ノ沢 B 遺跡	
1 調査の経過	30
2 遺跡の層序	30
3 遺構・遺物の分布	32
4 発見された遺構	49
5 出土した遺物	42
VI まとめ	
1 遺物について	48
2 遺構について	49
主要参考文献	50
付表 1 新庄中核工業団地関係遺跡調査行程表	4
付表 2 福田山周辺の遺跡	6

挿図目次

第1図 新庄中核工業団地関係遺跡分布図	2
第2図 福田山周辺の遺跡分布図	7
第3図 福田山A遺跡全体図	9
第4図 31・32-45G北壁土層セクション	10
第5図 福田山A遺跡遺構配置図	11
第6図 4号土壤平面図	12
第7図 23号住居跡平面図	14
第8図 5・27号土壤、22号落ち込み平面図	15
第9図 3号土壤・19号落ち込み平面図	17
第10図 8・14号落ち込み平面図	18
第11図 福田山A遺跡A'区地形図	20
第12図 11号土壤平面図・土器拓影図	21
第13図 福田山A遺跡土器拓影図	23
第14図 福田山A遺跡石器実測図	25
第15図 福田山B遺跡全体図	27
第16図 25-14G西壁土層セクション	28
第17図 1・2号土壤平面図	29
第18図 磨製石斧実測図	29
第19図 仁間磯ノ沢B遺跡全体図	31
第20図 41・42-25G北壁土層セクション	32
第21図 仁間磯ノ沢B遺跡遺構配置図	33
第22図 1・2号住居跡平面図	34
第23図 東区遺構配置図	36
第24図 12-17・22・23号落ち込み平面図	37
第25図 3号落ち込み平面図	39
第26図 9・31号落ち込み平面図	41
第27図 仁間磯ノ沢B遺跡土器拓影図（1）	43
第28図 仁間磯ノ沢B遺跡土器拓影図（2）	45
第29図 仁間磯ノ沢B遺跡磨製石器実測図	46
第30図 仁間磯ノ沢B遺跡打製石器実測図	47

図版目次

- 図版1 新庄中核工業団地全景（新庄市開発室提供）
- 図版2 福田山A遺跡 △発掘風景 ▽遺跡近景
- 図版3 福田山A遺跡 △西区遺構分布状況▷35~40—54G南壁▽76~81—61G南壁土層
- 図版4 福田山A遺跡 △4号土壤土層セクション ▽8号落ち込み検出プラン
- 図版5 福田山A遺跡 △5・27号土壤遠景（東より）▽5・27号土壤遠景（西より）
- 図版6 福田山A遺跡 △3号土壤平面プラン ▷同 土層断面 ▽同 完掘状況
- 図版7 福田山A遺跡 △23号住居跡近景（同 全景）▽現地説明会風景
- 図版8 福田山A遺跡 △A区発掘風景 ▽11号土塙近景
- 図版9 福田山A遺跡 △第I～II群土器（表面）▽第I～II土器（裏面）
- 図版10 福田山A遺跡 △第III群土器（表面）▽第III群土器（裏面）
- 図版11 福田山A遺跡 △第V群土器 ▽石皿
- 図版12 福田山A遺跡 打製石器
- 図版13 福田山B遺跡 △遺跡遠景（1）▽遺跡遠景（2）
- 図版14 福田山B遺跡 △25—14G土層セクション▽55—20～24G土層セクション
- 図版15 福田山B遺跡 △2号土壤全景 ▽磨製石斧出土状況
- 図版16 仁間磯ノ沢B遺跡 △遠景（1）▽遠景（2）
- 図版17 仁間磯ノ沢B遺跡 △発掘風景 ▽中央区近景
- 図版18 仁間磯ノ沢B遺跡 △34・35—20G南壁土層セクション ▷71・72—47G北壁土層セクション ▽40・41—25G北壁土層セクション
- 図版19 仁間磯ノ沢B遺跡 △西区全景 ▽7号落ち込み近景
- 図版20 仁間磯ノ沢B遺跡 △東区発掘風景 ▽東区遺構検出状況
- 図版21 仁間磯ノ沢B遺跡 △3号落ち込み平面プラン▽3号落ち込み土層セクション
- 図版22 仁間磯ノ沢B遺跡 △9号落ち込み平面プラン▽3号落ち込み土層セクション
- 図版23 仁間磯ノ沢B遺跡 △第I～II群土器（表面）▽第I～II群土器（裏面）
- 図版24 仁間磯ノ沢B遺跡 △第II～IV群土器（表面）▽第II～IV群土器（裏面）
- 図版25 仁間磯ノ沢B遺跡 △第III群土器（表面）▽第III群土器（裏面）
- 図版26 仁間磯ノ沢B遺跡 △打製石器I（表面）▽打製石器I（裏面）
- 図版27 仁間磯ノ沢B遺跡 △打製石器II（表面）▽打製石器II（裏面）
- 図版28 仁間磯ノ沢B遺跡 磨製石器

I 調査の経緯

1 調査に至る経過（第1図）

新庄中核工業団地として計画された、通称「福田山」と呼ばれるこの地域は、新庄市街地の西方約4kmにあり、国道47号線と新田川にはさまれた緩やかな丘陵地帯である。周囲の平面より40~50m程高い丘陵を松・杉その他の雑木の林が覆っており、国道添いの農業集落に隣接する閑静な地域である。土地利用はあまり進んでおらず、周囲の仁間・福田・福宮・角沢などの地区民によって、集落寄りの北側および東側が畠地として利用されている程度である。丘陵下の平坦面はほとんど水田で、昭和の初めから区画整理が進められ、新庄盆地の米どころとなっている。

この自然豊かな地域が工業団地として注目される理由は、有利な地理的条件にある。最上地方の中核都市で交通の要衝でもある新庄市、その中でも国道と国道の交叉する南部地域に隣接し、また国道47号線にも沿っている。通産省の工場適地指定もあり、昭和40年代の後半になって工業団地造成の気運が地元を中心に高まり、山形県総合開発計画の中でも内陸型の大規模中核工業団地として位置付けられるようになってきている。山形県と新庄市の計画では、米沢八幡原中核工業団地に次ぐインダストリアル・パーク構想の工業団地として、工業基盤の比較的弱い最上地方の経済発展の起爆剤にしようというもので、「最上開発の拠点」としての役割が期待されている。

現在総面積400haのうち第一次造成地域として210haの用地買収や関連調査が進められており、昭和56年度から造成工事にかかる予定である。すでに昭和55年8月には、地域振興整備公団の事務所も開設され本格的な造成事業に入ろうとしている。

福田山一帯は、埋蔵文化財包蔵地の調査が遅れており、つい最近までは遺跡が一つも確認されていない状態であった。このため山形県教育委員会では、昭和50年に新庄市教育委員会の協力を得て、この付近の遺跡分布調査を行ない、第1図のような7つの遺跡を新しく発見した（文献1）。その後県教育委員会では、県開発局・新庄市教育委員会・同市開発室および地域振興整備公団等と協議を重ね、第一次造成地域にかかる5遺跡のうち仁間磯ノ沢A・C遺跡は縁地帯として保存することとし、残る福田山A・B・仁間磯ノ沢Bの3遺跡について工事にかかる部分のみ、昭和55年度に緊急発掘調査を実施することになったものである。なお昭和54年度秋に、県教育委員会が主体となって上記3遺跡の試掘を伴う再度の分布調査を実施している。



第1図 新庄中林工業団地開発跡分布図

2 調査の経過（第1図・表1）

発掘調査は昭和55年5月7日から同年9月5日までの実質80日間にわたって実習した。調査は、はじめ福田山A・福田山B・仁間磯ノ沢Bの3遺跡について、磁北を基準にした2m毎のグリッドを設定し、つぎに2×8mを単位とする細長いトレンチをほぼ10mおきに掘り下げて、遺物包含層の有無や遺構の分布状況について確認を行なった。これと平行して、昭和50・54年の分布調査時点では樹木が多くて調査できなかった大坪に至る中道の北側丘陵部の試掘調査も実施している。この段階の調査には5月8日から6月13日までの約5週間実質27日を要している。

調査の結果、福田山A遺跡の西南約300mの放牧場跡地から新たに遺構を一ヶ所検出したので、この地域を福田山A遺跡のA'区と名付け以後の発掘調査に含めることになった。3つの遺跡の中では、とくに福田山A遺跡と仁間磯ノ沢B遺跡に縄文時代の遺物や遺構が認められたため、7月以降の調査では両遺跡に主眼を置いて精査を行なっている。

調査の中盤6月16日からの4日間に、福田山A・仁間磯ノ沢B遺跡のうち遺物を包含する地層が深い所は、重機械を用いてうわ土の除去を行なった。

遺構精査は、おおむね福田山A遺跡A区→福田山B遺跡→仁間磯ノ沢B遺跡→福田山A遺跡西区から東区の順に行なっている。このうち福田山A遺跡A'区については、6月19日から26日までで200m²の面整理を終え、縄文時代の落し穴と思われる土壙1基と性格不明の落ち込み1ヵ所を検出した。A'区についてはその後7月30日から8月26日までの期間に再度拡張および精査を実施している。

福田山B遺跡については、古くからの畑耕作より地層が相当擾乱されていることと、遺物の主たる分布地域が工業団地の外側にあることなどから、遺構・遺物が極めて少なかったため、中盤の早い段階7月4日で大方の調査を終了した。

仁間磯ノ沢B遺跡については、7月7日から遺構精査をはじめ7月中旬にはば調査を終了した。本遺跡は茅および雑木の根が密集し調査にもっとも難渋した場所であるが、工業団地の取付け道路予定地を中心に縄文時代に属する2棟の堅穴住居跡のほか土壙・落ち込み等を検出している。

福田山A遺跡の精査は調査の終盤7月25日からはじめ、9月4日に終了した。3遺跡の中では遺構が時期的にもっとも多様な場所であり、縄文時代から江戸時代にかけての堅穴住居跡や土壙など10数例を検出している。この間8月8日に一般市民を対象とした現地説明会、9月4日に調査関係者による現地踏査会を実施している。

なお最終的な発掘面積は、福田山A遺跡1700m²、福田山B遺跡500m²、仁間磯ノ沢B遺跡900m²の計3100m²にのぼり、このうち精査した面積は約2100m²である。

付表1 新庄中核工業団地間係遺跡調査行程表

調査内容	月・日		5月			6月			7月			8月			9月		
	7~9日	12~16日	19~23日	26~30日	2~6日	9~13日	16~20日	23~25日	30~4日	7~11日	14~18日	22~25日	28~1日	4~8日	11~22日	26~29日	1~5日
準備	資材準備地 免振区設定																
調査	手掘り 重機械使用																
面整理事業	面整理 遺構検出																
遺構精査	福田山A 東区 中央区 西区 A区																
福田山B																	
仁賀穂ノ沢B 東区 中央区 西区																	
実測	土層断面 水糸配り 平面実測																
写真	全体写真 細部写真																
備考	(凡例) ■ 福田山B ■ 福田山A ■ 破壊開始 ■ 破壊終了 ■ 調査開始 ■ 調査終了																
		福田山B調査開始			福田山A調査開始		破壊開始			福田山B調査終了		破壊終了		現地説明会		福田山A調査終了	

II 遺跡の概観

1 遺跡の立地と環境

新庄盆地は、山形県の最北部に位置し、南と東の一部を奥羽山脈とその支脈によって、西北と南の一部を出羽山地とその支脈によって囲まれている。神室山から南へ天狗森、小又山、火打山、杣藏山などが連なり、北西には前神室山、水晶森、黒森などの峻険な山峰が連なっている。これらの稜線から西方へ流れる溪流は、新田川・升形川・泉田川・金山川となり、やがて最上川に注ぎ込む（文献2）。

福田山A遺跡をはじめとする本地域の遺跡群は、新田川により開折され段丘化した福田山丘陵の山麓上に位置し、開折された中央部地帶には、数ヶ所の湧水地がある。標高は70～130mを測るが、枝状にのびる各小丘陵の高さがほぼ同じなこと、谷頭が浸蝕されていることが特徴である。ただし北西部の本合寄りに、かなり広い高位段丘がともなっており、福田山丘陵の南を西流する新田川の河岸の低地には、中位段丘が形成されている。

各遺跡とも地目は畠地・荒地・雜木林などとなっている。北西部には2ヶ所の旧石器時代の遺跡が丘陵頂部（標高100m）にあり、開折された中央部北側に福田山A・福田山B遺跡の2ヶ所、東部丘陵の南側山麓縁辺部に仁間磯ノ沢A・仁間磯ノ沢B・仁間磯ノ沢C遺跡3ヶ所計7遺跡が確認されている。なお、本地域の中央部から南西部にかけての北側丘陵部には、福田山A遺跡A'区とした地点以外、試掘を行なっても遺跡が確認されなかつた。

新庄市には現在25ヶ所の遺跡が確認されている（註1）が、地元の人々が知っていても登録されていない遺跡がかなりあり、それらを含めると50近い数になる。

新庄盆地における祖先の人々の足跡は、これまでのところ後期旧石器時代にまで遡ることができる。新庄盆地の縁辺部にある乱馬堂遺跡や山屋・横前・新堤・南野遺跡などがその主なものである。これらの遺跡は昭和37年の横前および新堤遺跡の発掘調査以来現在まで数回にわたる調査が行なわれ、東日本でも注目される地域となっている。後期旧石器文化の追求は、ナイフ形石器を主要用具として伴出する石器を包括した編年的研究を主に論が展開してきたといえるが、新庄盆地ではとくに東山型ナイフと杉久保型ナイフの先後関係が関心的となっている。

この後、今から約1万年前になって土器を伴なう文化に移るが、この時期の遺跡としては新庄市街のすぐ北にある荒小屋遺跡が有舌尖頭器の変遷と関連して注目される。縄文時代の早期や前期になると福田山丘陵内に遺跡がみられ、中期には下馬札遺跡や虫の森遺跡

など河川の河岸低地にも遺跡が営まれるようになる。縄文時代の晩期の遺跡としては、新庄警察署の敷地にある宮内遺跡が豊富な資料を出しているが、一方福田山丘陵も仁間磯ノ沢A遺跡など小さな遺跡が点々とみられる。

弥生時代の遺跡は、新庄市内でアメリカ式石鎌が数ヶ所で発見されているが、土器や遺構を伴なう遺跡はまだ明確でない。福田山A遺跡の土壇内から発見された数片の土器は、この意味で貴重な成果である。

古墳時代以降奈良・平安時代にかけての遺跡もこれまで新庄盆地ではあまり知られていない。仁間磯ノ沢B遺跡で2つの須恵器片が発見されたが、最近では新庄市の角沢仁間遺跡および宮野遺跡で平安時代の土器が発見されている(文献8)。とくに宮野遺跡では平安時代後半に属する竪穴住居跡が1棟検出されている。また角沢仁間遺跡からは、平安時代の土器とともに須恵器系の中世陶器も幾つか出土している。当該期の新庄盆地の様相も、今後次第に解明される可能性が高くなっている。

(註1) 山形県教育委員会1978「山形県遺跡地図」

付表2 福田山周辺の遺跡

地図番号	遺跡名	遺跡番号	所在地	立地(標高)	時期
1	福田山B	894	新庄市大字福田字福田山	丘(95m)陵	縄文時代
2	福田山A	893	新庄市大字福田字福田山	丘(88m)陵	縄文時代早・前期、弥生時代
3	仁間磯ノ沢A	890	新庄市大字仁間字磯ノ沢	丘(85m)陵	縄文時代前期
4	仁間磯ノ沢B	891	新庄市大字仁間字磯ノ沢	丘(84m)陵	縄文時代早～中期、平安時代
5	仁間磯ノ沢C	892	新庄市大字仁間字磯ノ沢	丘(77m)陵	縄文時代
6	荒小屋	新規	新庄市十日町荒小屋	段(115m)丘	旧石器時代末～縄文時代
7	下馬札	882	新庄市大字升形字上三野	段(86m)丘	縄文時代中期
8	宮内	885	新庄市宮内町	平(90m)地	縄文時代後・晚期
9	乱馬堂	875	新庄市金沢字亂馬堂	段(115m)丘	後期旧石器時代、縄文時代、中世
10	横前	876	新庄市金沢字金沢山	段(120m)丘	後期旧石器時代
11	新堀	877	新庄市金沢字前野	段(120m)丘	後期旧石器時代
12	虫の森	879	新庄市大字角沢字虫の森	段(89m)丘	縄文時代中期
13	角沢仁間	新規	新庄市大字角沢字仁間	段(85m)丘	縄文時代晩期、平安時代、鎌倉時代
14	南野	878	新庄市大字角沢字南野	丘(98m)陵	後期旧石器時代
15	清水	新規	新庄市大字角沢字清水	段(76m)丘	縄文時代前・中期



第2図 福田山周辺の遺跡分布図

III 福田山A遺跡

1 調査の経過（第3図、図版2）

福田山A遺跡は、福田山北部丘陵の中央やや東寄りの据部に立地する。福田山丘陵を東西に流れる大沢川の奥部にあたり、今も「土清水」とよばれる清水が遺跡のすぐ南東部に湧き出している。本遺跡は全体が工業団地の造成区域に含まれるため、東西160m、南北60mの遺跡全域に発掘区を設定した。

調査期間は、昭和55年5月13日から始まり、一時中断期間を置いて同年9月4日までである。調査はじめ $2 \times 10\text{m}$ のトレンチをほぼ10m間隔に設定し、遺物の包含状態や遺構の分布について確認した。なお遺跡の大沢をはさんで対岸にあたり北斜面の畠地からは、再度にわたる表面調査でも遺物がまったく発見されず、遺物包含層も認められなかつたので発掘対象区域から除外している。

つぎに遺物や遺構が比較的みられた発掘区東側を中心に、6月16日から一部重機械を用いて拡張し、遺構検出および精査を実施した。また本遺跡の西方300mの放牧場跡から新たに遺構を検出したので、この地域を福田山A遺跡A区と名付け、6月18日より面拡張と遺構精査を行なっている。両地区とも発掘区南斜面のところどころに遺物や遺構がみられるが、遺物包含層が浅い所は畠の耕作による擾乱が著しく、遺構の検出が困難であった。最終的な発掘面積は、A区も含め1700m²である。

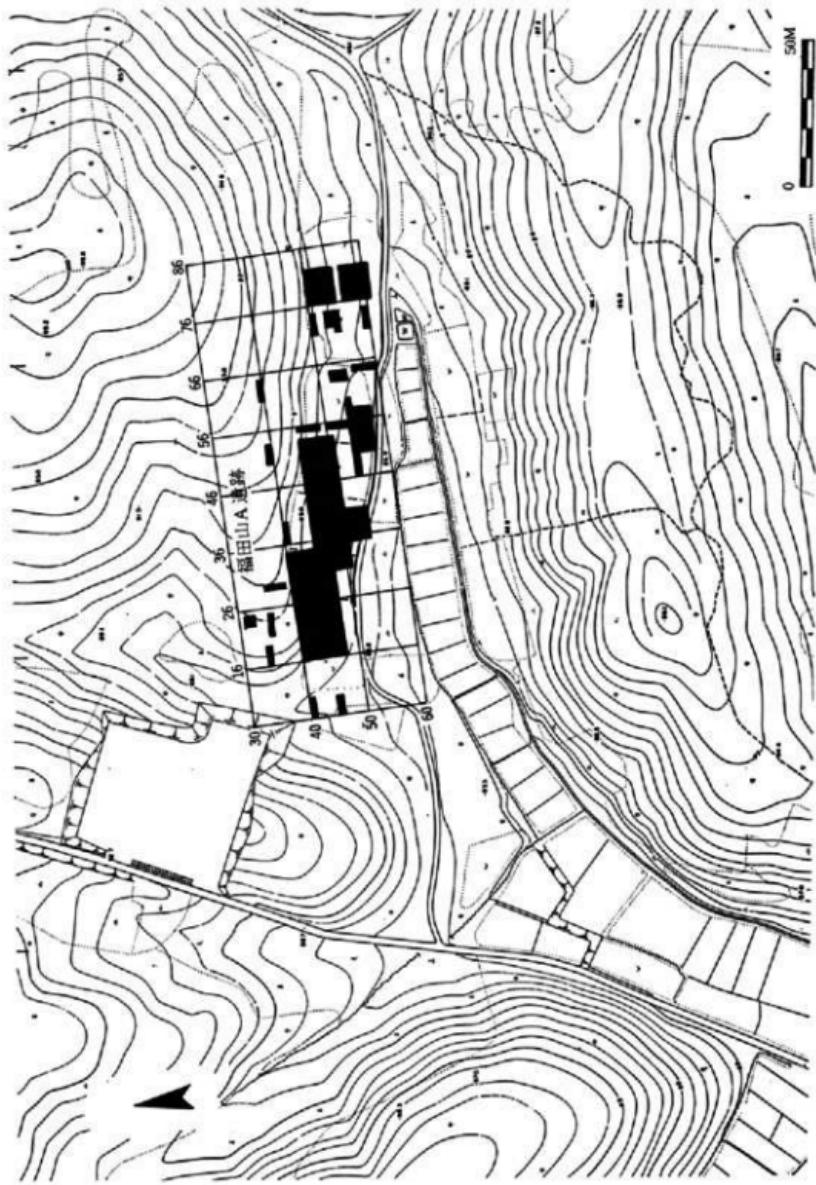
2 遺跡の層序（第4図、図版3）

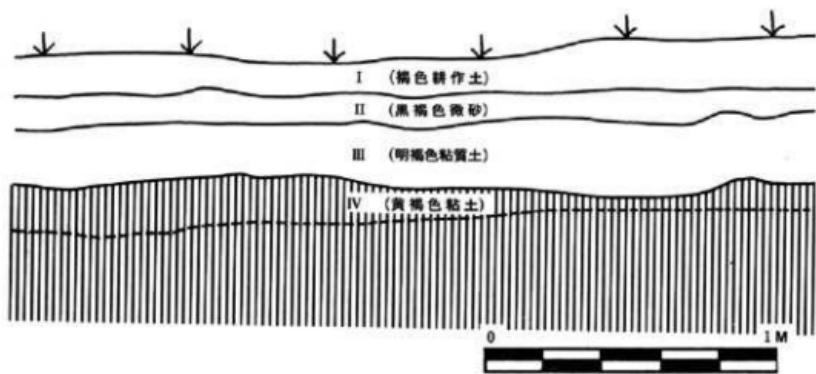
今回の発掘地区が丘陵の南西斜面にあたるため、地層は北から南ないし北東から南西側にかけてゆるやかな傾斜を示す。

発掘区の北側31・32—45G北陸で確認した本遺跡の基本的な層序は、つぎのとおりである（第4図）。第I層が褐色耕作土で厚さが10~18cm、第II層が黒褐色微砂で厚さが10~17cm、第III層が明褐色粘質土で20~26cm、第IV層が黄褐色粘土層となる。第IV層は地山にあたる無遺物層で、第III層が第II層から第IV層への漸移層である。

発掘区北側は、第II・III層がほとんどみられず、第I層の耕作土からすぐ第IV層の地山に達する。発掘区南側は、南に下がるにつれて第II層が深くなり、最深部では50cmに達する（図版3）。なお第I層とした耕作土は、地点によって近年の耕作土（第Ia層）と旧耕作土（第Ib層）に分けられる。遺物は第II層から主に発見されるが、第III層および第IV層直上からも出土する。

第3図 福田山A遺跡全体図





第4図 31・32-45G 北壁土層セクション

3 遺構・遺物の分布（第5図、図版3）

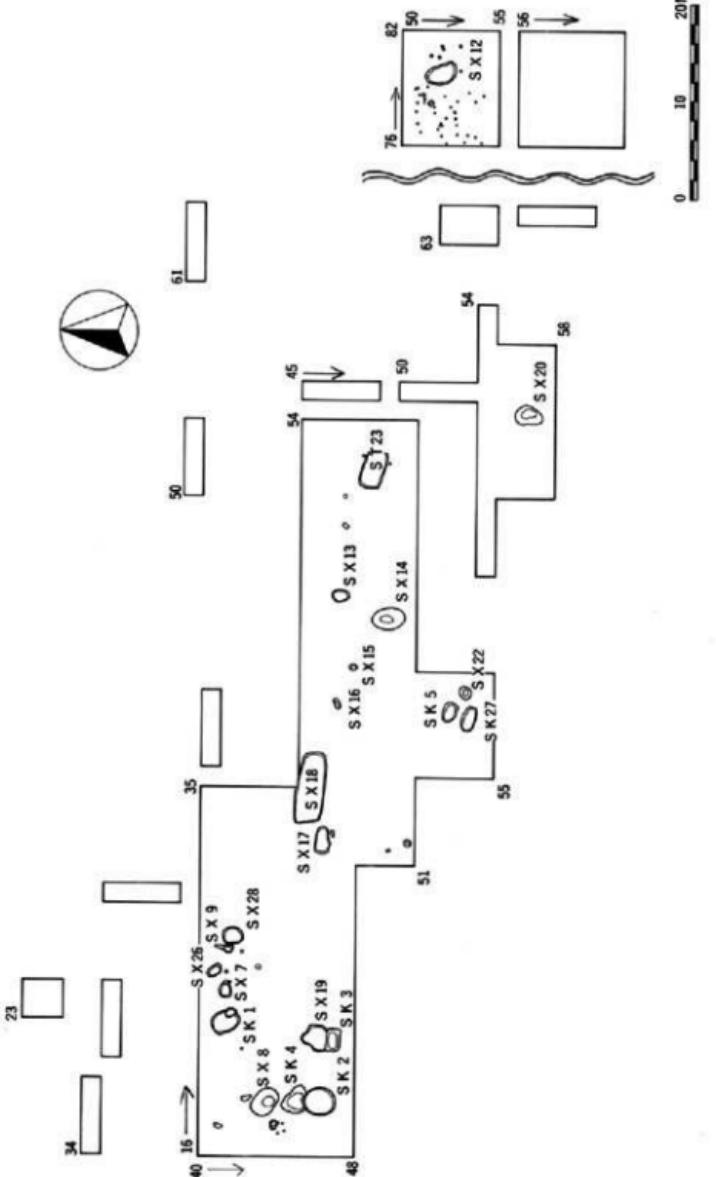
遺物は、発掘区の南西部から主に発見された。ほぼ第II層黒褐色微砂の堆積分布に比例するが、遺構が比較的多く検出された西区（16～35-40～54G）では、第II層がごく僅かしか存在しないにもかかわらず、第IV層直上面から土器や石器の細片が多く出土する。おそらくは本来の遺物包含層が耕作等によって削平されたものであろう。一方発掘区南東隅にあたる東区（76～81-50～61G）では、第II層が厚く堆積しているが、遺物はほとんど認められていない。第II層とした黒褐色微砂は、後述する福田山B・仁間磯ノ沢B遺跡の土層観察と考え合せると、必ずしも純粹な遺物包含層とはいはず、その中に地点によって遺物を含むと考えられる。

福田山A遺跡から出土した遺物には、縄文土器・弥生土器・石器・堅果類種子などがある。その分布は遺構の分布状況とほぼ同様であるが、遺構によって時期も若干異なる。

発掘調査によって検出された竪穴住居跡1棟・土塙5基をはじめ性格不明の落ち込みやピット群などがある。時期は縄文時代早期後葉・前期初頭・弥生時代中期・近世から近代と多様であるが、とくに縄文時代前期初頭の遺構が目立つ。遺構は標高86～88mの等高線に添った形で分布し、発掘区の中央やや南西寄りの精査地区西区および中央区（36～53-45～54G）にかけて集中する。

なお本遺跡の西方300mにあるA'区からは、精査地区的ほぼ中央から落し穴と思われる土壙が1基検出されている。覆土中の遺物から時期は縄文時代前期初頭と想定され、時期的にも竪穴住居跡等と密接な関連を有する。

第5図 福田山A遺跡遺構配置図



4 発見された遺構

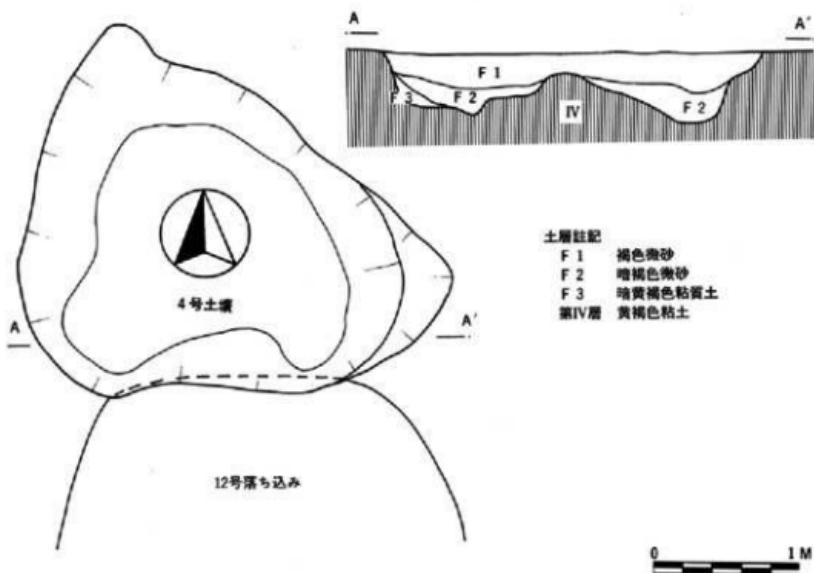
4号土壙（第6図、図版4）

精査地区西端18・19～44・45Gで検出された土壙で、南側が2号落ち込みによって切られている。遺構確認面は第IV層黄褐色粘土の上面である。平面形が東西に長い不整の精円形を呈し、東西最大径2.97m、南北最大径2.54mを測る。

壁は第IV層を35～64cm掘り込んでおり、ややゆるやかに立ち上るが、東壁で一段緩い傾きをもつ。底面はかなり凹凸があり、しまりが弱い。

土壙の覆土は、3層に分けられる。覆土1層がしまりのある均一な褐色微砂、同2層が黄褐色粘土粒子を少量含む暗褐色微砂、同3層が粘土粒子を多量に含む暗黃褐色粘質土である。覆土1層はほぼ水平な堆積状況を示し、同2層が下面の窪地に落ち込んだ状態を示す。同3層は西壁際に薄く堆積する。

土壙の覆土ないし床面からは、遺物がまったくみられなかった。本土壙の覆土は後述する23号住居跡の覆土1層に類似することから、遺物が発見されていない段階で断定はできないが、縄文時代前期初頭頃の土壙とも考えられる。



第6図 4号土壙平面図

23号住居跡（第7図、図版7）

精査地区中央区東端50～52・48・49Gで検出された堅穴住居跡で、住居跡中央部が昭和54年度の分布調査における坪掘りによって第IV層上面まで掘り下げられている。遺構確認面は第IV層直上である。平面形が不整の長方形を呈し、東西検出径4.12m、南北径約2.35mを測る。

壁は第IV層を5～10cm掘り込んでおり、ややゆるやかに立ち上る。床面は北から南側にかけてやや傾斜をみせるが、北壁際が硬くしまり、南側は比較的軟かい。柱穴と思われるピットが住居跡内に9個、住居跡外に2個の計11個発見されている。柱穴の形状や位置などから、E P 30～32・38が主柱穴その他は支柱穴としての役割をもつと推定される。周溝や炉などの施設は認められない。

住居跡の覆土は、2層に分けられる。覆土1層がしまりのある均一な褐色微砂、同2層が黄褐色粘土粒子を微量含む暗褐色微砂で、各層ともほぼ水平な堆積状況を示す。

住居跡北壁中央寄りの覆土1・2層から、縄文土器が8片出土している（第13図13～16）。深鉢形土器の口縁部に細いR L斜縄文が施されているもので、時期は縄文時代前期初頭頃に位置付けられる。

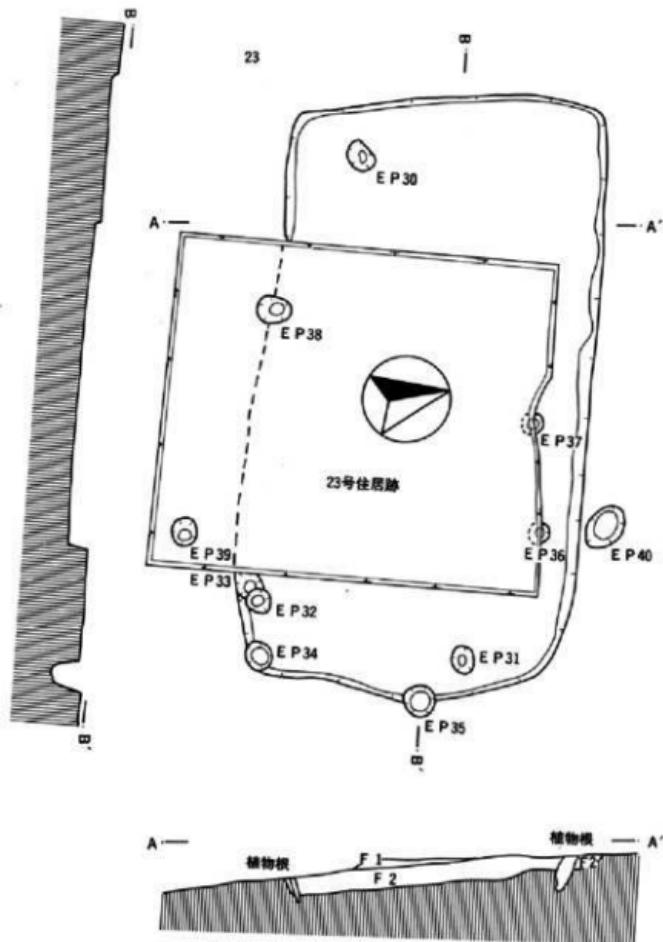
5・27号土壤（第8図、図版5）

精査中央区南西隅38・39～52～54Gで検出された二つの土壤で、東西方向に並んでいる。遺構確認面は第III層明褐色粘質土の上面である。平面形が二つとも不整の長楕円形を呈し5号土壤の長軸検出径2.14m、短軸径1.23m、27号土壤の長軸径2.63m、短軸径1.46mを測る。

5号土壤の壁は、第III・IV層を30～35cm掘り込んでおり、ややゆるやかに立ち上る。底面はほぼ平坦で、ややしまりがある。土壤の覆土は4層に分けられ、覆土1層が炭化物を多量に含む黒褐色微砂、同2層が炭化物と焼土を多量に含む暗赤褐色微砂、同3層が粘土粒子と炭化物・焼土を少量含む暗褐色微砂、同4層が粘土ブロックを多く含む濁黄褐色粘質土である。覆土2・4層に土器片を少量含んでいる（第13図21～23）。

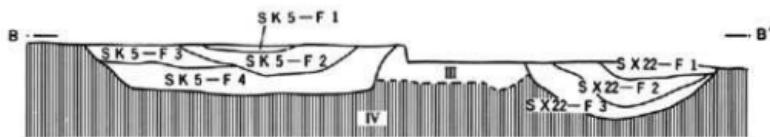
27号土壤の壁は、第III・IV層を20～23cm掘り込んでおり、やや垂直に立ち上る。底面は平坦で、しまりがある。土壤の覆土は2層に分けられ、覆土1層が炭化物を少量含む褐色微砂、同2層が炭化物と粘土粒子を少量含む暗褐色微砂で、両層ともほぼ水平な堆積状況を示す。覆土2層から土器片が1片出土している（第13図20）。

これらの土器は、薄手で縦ないし横方向のR L縄文が施されているもので、口縁部に平行沈線のある縦ないし浅鉢の存在などから、弥生時代中期後半頃に位置付けられる。



土層記
 F 1 橙褐色砂
 F 2 喀褐色微砂
 第IV層 黄褐色粘土

第7図 23号住居跡平面図

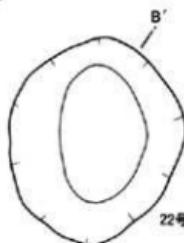


土層註記

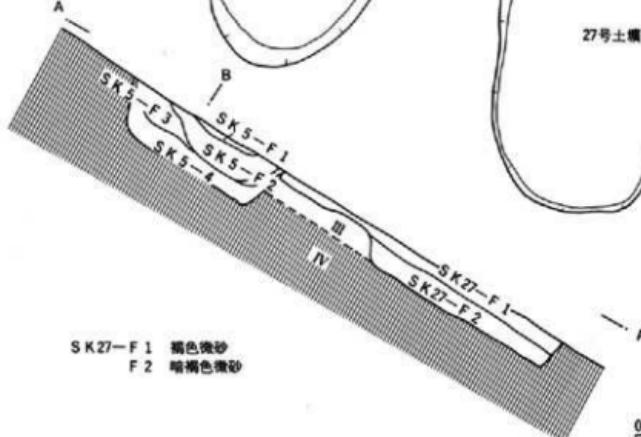
SK 5-F 1	黒褐色微砂	S X22-F 1	暗褐色微砂
F 2	暗赤褐色微砂	F 2	暗褐色粘質微砂
F 3	暗褐色微砂	F 3	暗黃褐色粘質土
F 4	深黃褐色粘質土	第III層	明褐色粘質土
		第IV層	黃褐色粘土

第III層

IV



22号落ち込み



SK 27-F 1 暗褐色微砂
F 2 暗褐色微砂

0 1M

第8図 5・27号土壤、22号落ち込み平面図

3号土壙（第9図、図版6）

精査西区中央21・22-46・47Gで検出された土壙で、北側にある19号落ち込みを切って作られている。平面形は隅丸長方形を呈し、東西径2.4m、南北径1.41mを測る。

壁は、第II～IV層を57～65cm掘り込んでおり、ゆるやかに立ち上る。底面は第IV層黄褐色粘土を掘り込んでおり、やや凹凸がある。土壙の覆土は5層に分けられる。覆土1層が粘土粒子を部分的に含む暗褐色微砂、同2層が粘土ブロックを多量に含む暗黄褐色粘質土、同3層が粘土粒子を少量含む暗褐色微砂、同4層が粘土粒子を霜降り状に含む明褐色粘質土、同5層が粘土ブロックを多量に含む濁黄褐色粘質土である。各層とも横方向よりは上下方向の不規則な堆積状況が目立つ。

土壙北東隅の底面上から径20cmの範囲に骨片がまとまって発見された。すべて細片でもとの形状は留めていないが、人骨の一部とみられる。他に遺物は認められないが、土壙の壁が第II層直上から掘り込んでいることも考え合せ、近世から近代にかけての土壙墓の一類と考えられる。

19号落ち込み（第9図・図版6）

精査西区中央21・22-45・46Gで検出された不整形の落ち込みで、3号土壙によって南側が切られている。東西検出径2.93m、南北検出径2.65m、深さ7cm前後を測る。壁は第IV層を浅く掘り込んでおり、底面が北から南にかけて30cm程傾斜する。

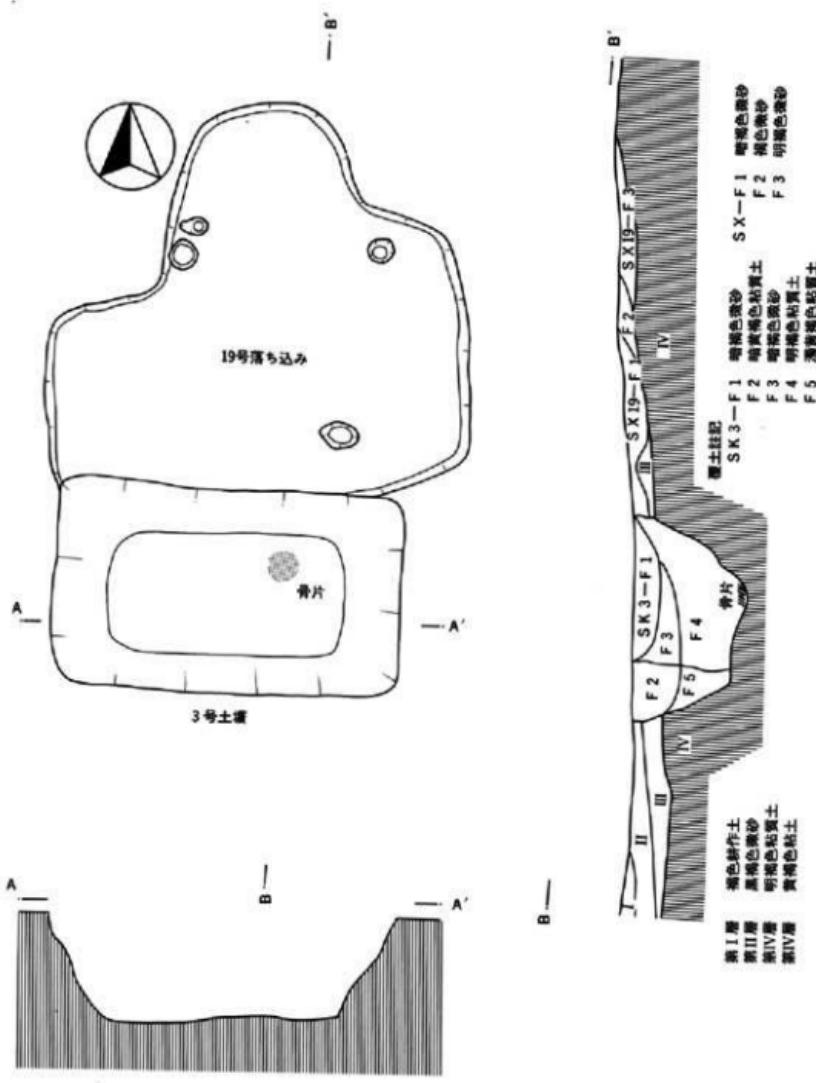
落ち込みの覆土は3層に分けられ、斜め方向に重複する形で堆積する。遺物は、覆土3層から不定形石器が1点出土している。19号落ち込みについては、斜面上の自然堆積土層の可能性もあり、人為的な造構としては疑問が残る。

8号落ち込み（第10図、図版4）

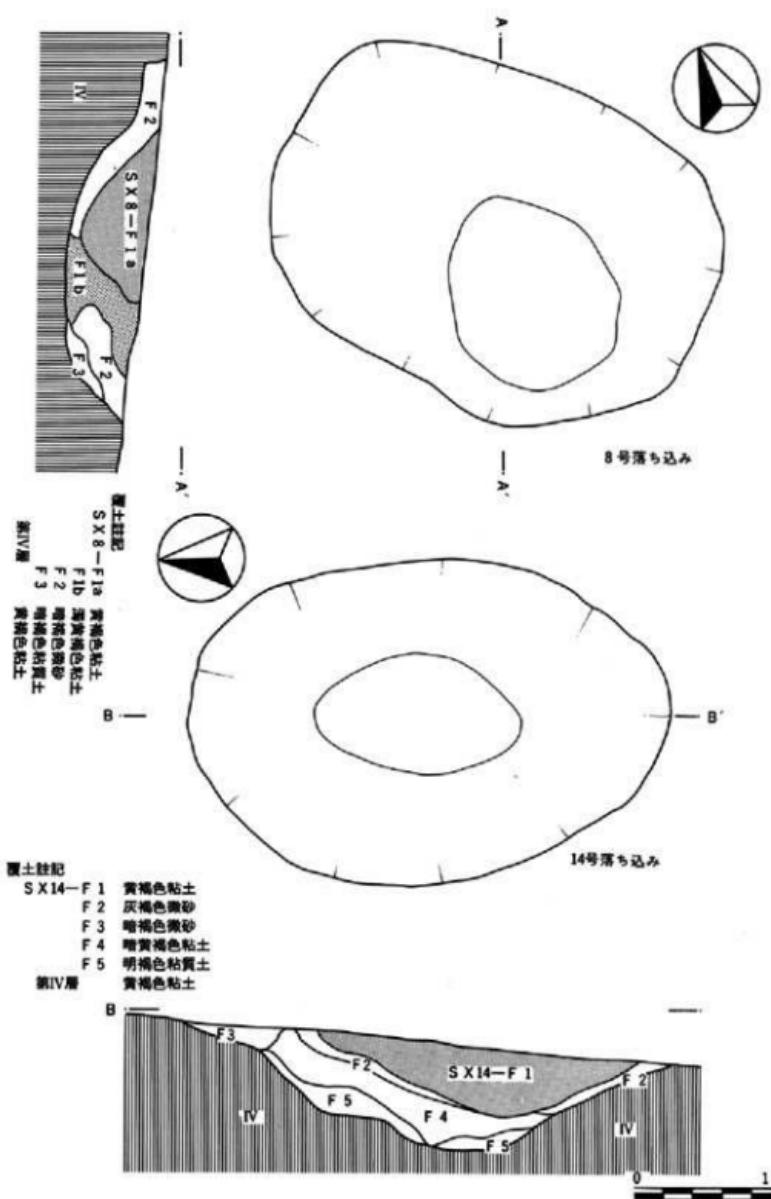
精査西区18・19-42～44Gで検出された不整橢円形の落ち込みである。長径3.09m、短径2.2m、深さが最深部で53cmを測る。当初周溝をもつ住居跡等の一部と想定していたが断面を深掘りして土層を観察した結果、覆土2層とした暗褐色粘質微砂が黄褐色粘土の下部に厚さ7～16cm幅で落ち込んでいることが判明し、風倒木根の一種と判断した。

14号落ち込み（第10図）

精査中央区43・44-48～50Gで検出された長橢円形の落ち込みである。長径3.31m、短径2.21m、深さが最深部で73cmを測る。本落ち込みも8号落ち込みと同様に、黄褐色粘土下部に暗褐色微砂が落ち込んだ風倒木根の一種と考えられる。各層とも遺物はみられない。



第9図 3号土塙・19号落ち込み平面図



第10図 8・14号落込み平面図

11号土壌（第11・12図、図版8）

福田山A遺跡の西南約300mの放牧場跡にあたるA区で検出された土壌である。A区は福田山北部丘陵の中央南斜面に立地し、昭和55年5月22日の試掘調査によって新たに発見された地区である。大坪部落に至る中道の北側には、舌状に張り出した南向きの小丘陵が連なっているが、試掘調査では本地区以外に遺物や遺構の検出地点は認められなかった。

調査は、試掘調査の際の坪掘り区にかかった本土壌を中心とし、東西20m、南北10mの範囲で拡張し遺構検出を行なった。なお全体の調査終了時近くの8月22日段階で、さらにこの地区的西南15mの場所に幅2m、長さ10~13.5mの十字形のトレンチを設定し補足調査を行なっている。A区は地表面から第IV層地山までの層が薄く、第III層が欠落している。

調査の結果、やや内側に入り込んだ南斜面の傾斜変換線上に土壌が1基だけ検出された。福田山A遺跡の他遺構から換算し11号土壌としたこの土壌は、平面形が不整の円形を呈し直径1.57~1.86mを測り、遺構検出面からの深さが最深部で1.55mある。

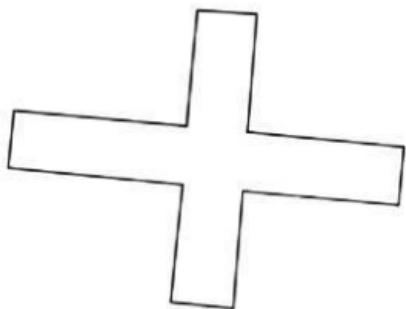
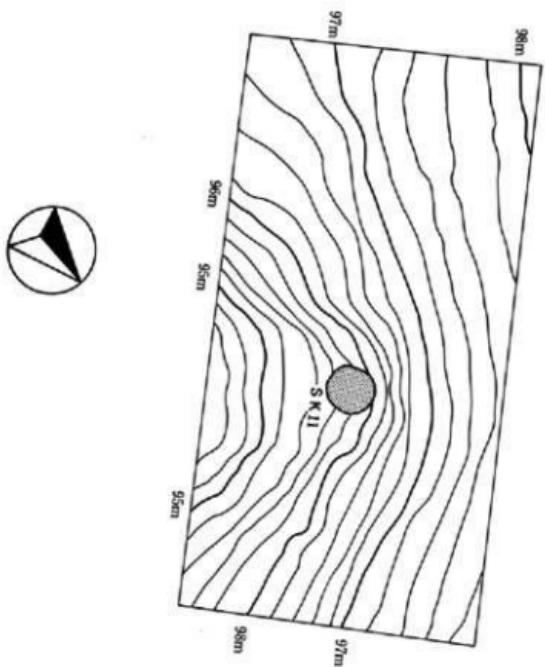
土壌の壁は、第II・IV・V層を約1.4m掘り込んでおり、下面が垂直に立ち上り、上面でやや内彎する。底面はほぼ平坦であるが、中央に直径45cm、深さ20cm程の小穴を有する。

土壌の覆土は、10層に細分され、覆土1~5・9層に炭化粒子を含んでいる。覆土6層の濁黄褐色粘質土は壁の崩壊土と考えられるものである。各層ともほぼ水平な堆積状況を示すが、覆土3・4層は中に深く落ち込んでいる（第12図）。

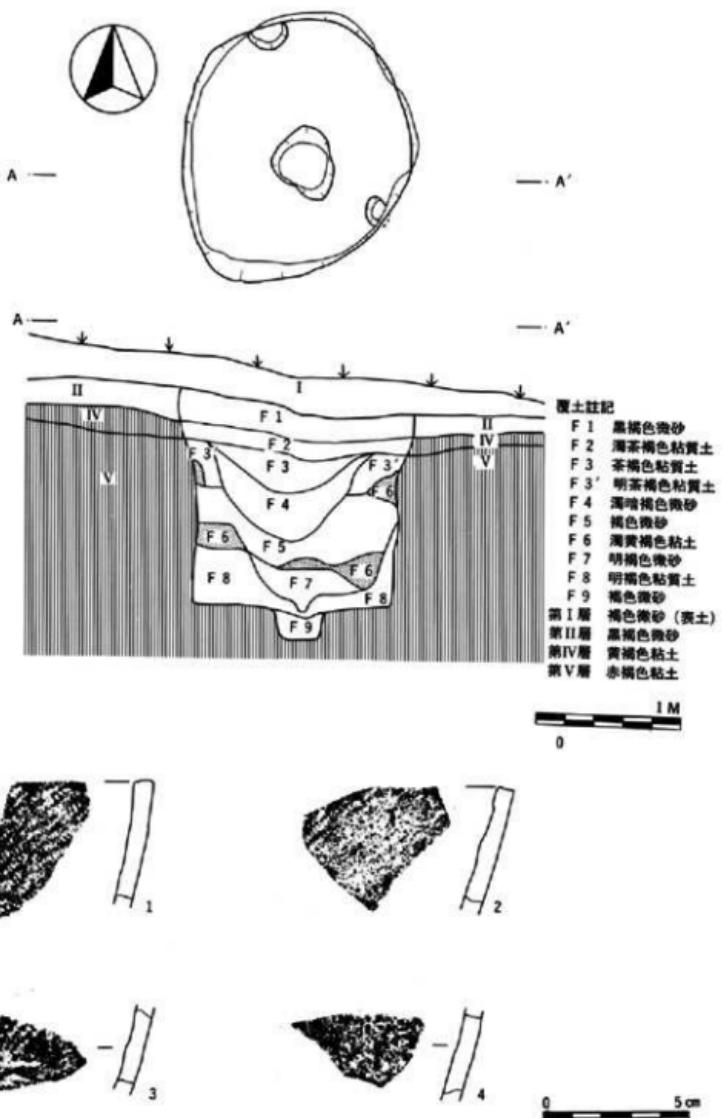
遺物は、縄文土器が覆土4層から2片（第12図2・3）、覆土8層から2片（同図1・4）出土している。器面全体に細いL字縄文が施され、口縁部は口唇部が平坦に整形され裏面の端がやや張り出した形態を示す。これらの土器は、縄文時代前期初頭頃に属するものであり、土壌もほぼ同時期の所産と考えられる。

この時期に地面に穴を掘って何かを作る場合、その用途としては墓塚貯蔵穴、住居跡、陥穴（おとし穴）などが考えられるが、11号土壌の場合、（1）覆土が自然堆積を示すこと、（2）住居跡などが近くにある形跡が認められないこと、（3）居住地としては適さない急斜面に立地すること、（4）土壌の底面に小穴をもつことなどから、陥穴の可能性がもっとも強いと思われる。

同様な陥穴と考えられる土壌の検出例は、近年全国各地で発見されているが、神奈川県横浜市霧ヶ丘遺跡の報告例（文献4）がよくその類例をまとめている。同遺跡の場合は、時期が主に縄文時代草創期ないし早期と考えられており、しかも丘陵傾斜変換部に群をなして存在しているという特徴があるが、その他については11号土壌の内容とかなり共通する点が多い。



第11図 福田山A遺跡A'区地形図



第12図 11号土壤平面図・土器拓影図

5 出土した遺物

(1) 土 墓 (第13図・第17図、図版9~11)

福田山A遺跡から出土した土器は、細片も含め約70片と少ない。これらの土器は大きく4群に分けられ、さらに各土器群は幾つかの小類に細分される。本節では土器の量が少ないため、第IV章の仁間巖ノ沢B遺跡の土器分類と共通な分類記号を用いて説明する。このため各分類記号の間に若干の空白を生じ、本遺跡の場合第IV群土器が欠落する。

第I群土器

貝殻文・沈線文を主な施文の特徴とする土器群で、3類に細分される。

a類 口唇部に貝殻腹縁圧痕文、口縁部の表裏両面に貝殻条痕文を有する土器である(第13図1~2)。1の口縁部から体部にかけて、一部繩文が認められる。胎土には石英などの粒子が多く含み、纖維の混入はみられない。

b類 表面に貝殻条痕文を有する深鉢の体部片で、a類に比べやや厚手の土器である(3)。胎土には石英などの細粒子が多く含み、纖維の混入はみられない。

d類 口唇部上端が平坦に整形され、裏面がよく研磨されている土器である。表面が剥落しており、調整手法や文様の有無などは不明である(4)。纖維は含まない。

第II群土器

繩文時代早期後半の繩文施文を特徴とする土器群で、2類に細分される。

a類 上げ底ないし張り出した平底の底部を有する類で、体部下端には単節の斜繩文が施されている(5)。胎土に纖維を含んでいる。

b類 斜繩文ないし羽状繩文が施されている深鉢の体部片のうち、やや厚手で、胎土に纖維を多く含むもの(6~10)。

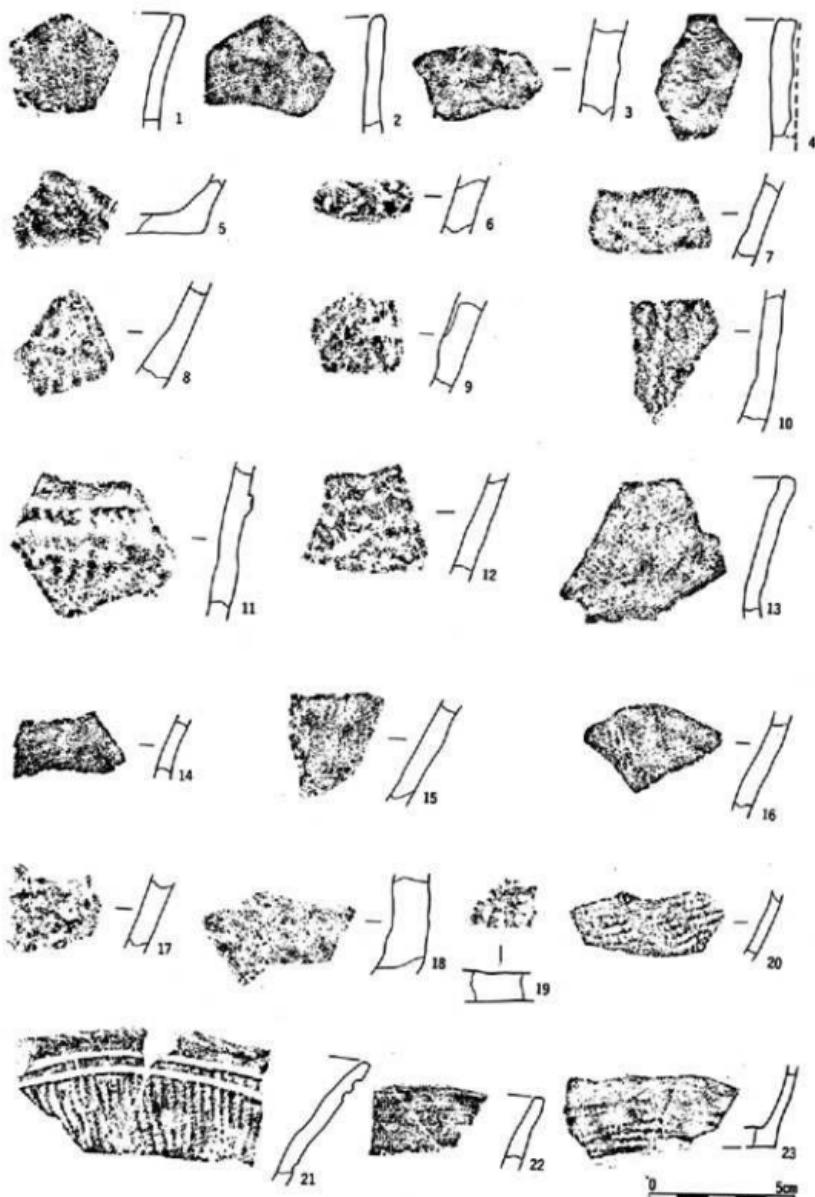
第III群土器

丸底一羽状繩文を基本とする繩文時代前期初頭に位置付けられる土器群で、3類に細分される。

a類 口縁部の隆起带上に、繩の末端を連続刺突させている類で、体部には羽状繩文が施されている(11~12)。胎土に纖維を多く含んでいる。

b類 斜繩文を施している土器で、前群に比べ節が細く密な繩文である(第12図1~4、第13図13~16)。口縁部が残っているものは、口唇部上端が平坦に整形され、口唇部裏側がやや張り出す。比較的薄手で、胎土に纖維の混入は認められない。23号住居跡および11号土壙からやまとまって出土している。

c類 縦方向の粗い撚糸文を施している土器である(17)。比較的厚手で、胎土に纖維を多く含んでいる。口縁部等の形態は不明である。



第13図 福田山A遺跡土器拓影図

このほか第III群土器に相当すると思われる土器の底部として、厚手で丸底のもの（18）や底部に斜縞文を施したもの（19）もみられる。

第V群土器

弥生時代に位置付けられる土器群で、2類に細分される。

a類 口縁部に2条、頸部に1～2条の平行沈線を有する壺ないし浅鉢形土器で、口唇部上端にR Lの斜縞文、口縁部から体部にかけて縦位のR L縞文が施されている（第13図21）。

b類 口縁部がやや外反し、口縁部に無文帯を有する壺形土器である（22）。かなり薄手で焼成が良好である。同じような壺形に属すると思われる体部下端から底部にかけての土器も2片発見されている（20・22）。

第V群土器としたものは計4片出土しており、すべて5・27号土壤覆土中からである。

（2）石 器（第14図、図版11・12）

福田山A遺跡からは細片も含め50点程の石器が出土しているが、そのうち調整痕ないし使用痕が認められるものは第14図に示した10点である。打製石器の器種としては、石鎌・不定形石器・剝片石器、磨製石器の器種としては石皿がある。

石鎌（第14図1～4）

4点出土している。出土地点は、第14図1・3が39・40-52・53Gの第II層、2が2号落ち込み覆土、4が24-41G第II層である。石材はいずれも硬質頁岩を用いている。

形態は1・2・4が凹基無茎形、3が平基無茎形に近いもので、2aの基部右側が欠損している。4の尖頭部には同心円状の磨滅痕が認められる。

不定形石器（第14図5・7・8）

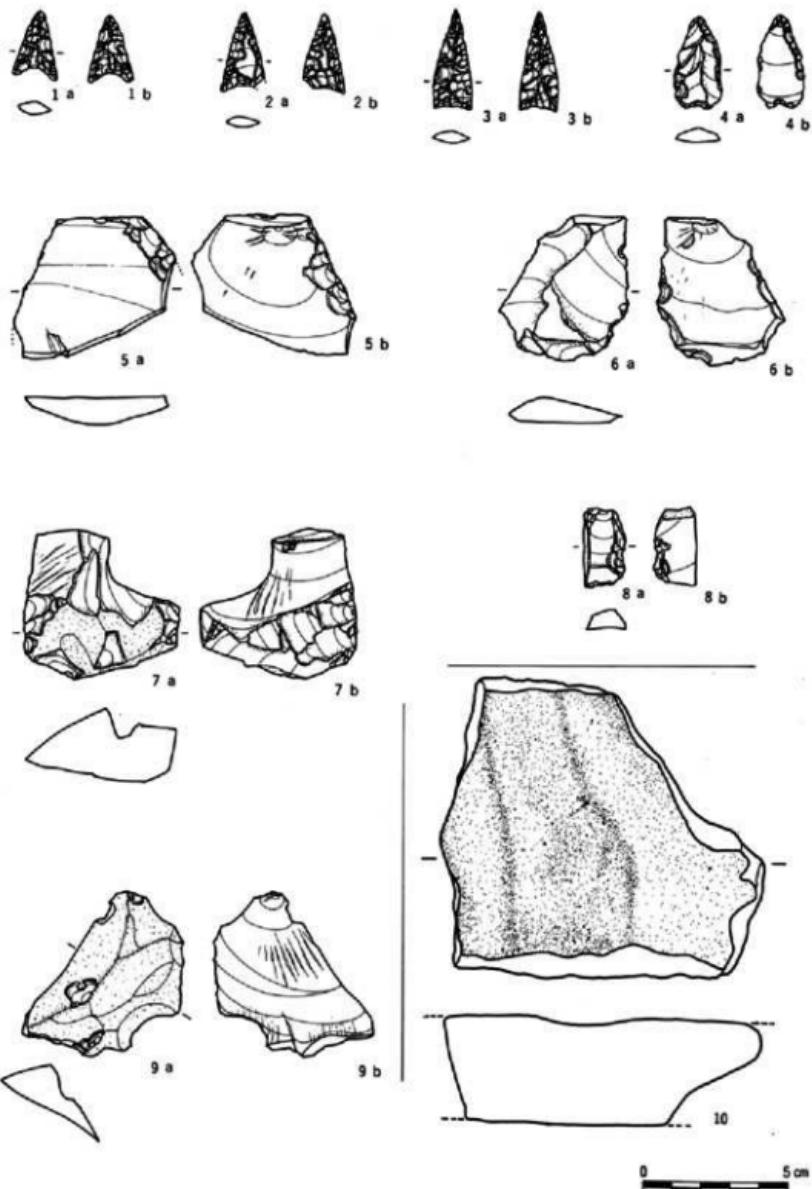
3点出土している。出土地点は、5が19号落ち込み覆土、7が58-54G第III層、8が23-31G第II層である。石材は5と8が硬質頁岩、7が黒曜石である。5は上面に打面を残し両側辺に鋸向した剝離調整が認められる。打面と反対側の刃部と思われる部分が欠損している。7・8は側辺の一部に両面からの調整が施されるもので、7aの右側辺および8aの下面に磨滅痕が認められる。

剝片石器（第14図6・9）

剝片の一部に加工痕ないし使用痕が認められるもので、2点出土している。出土地点は6が24-41G第II層、9が57-54G第III層、石材は6が硬質頁岩、9が黒曜石である。

石皿（第14図10）

39-50G第I層から出土した砂岩製の石皿片である。中央に縦方向の磨面がみられる。



第14図 福田山A遺跡石器実測図

IV 福田山B遺跡

1 調査の経過（第16図、図版13）

福田山B遺跡は、福田山北東部の小丘陵の先端部および東斜面にかけて立地する。地目は畠地および茅の茂る荒地となっている。北半分が工業団地地区外になっているため、調査はほぼ送電線を境にした遺跡の南半分を対象に実施した。発掘地域の範囲は、南北40m東西100mになる。

調査期間は、5月8日から始まり、一時中断期間を置いて7月4日までである。調査ははじめに2×10mのトレンチと2m四方の柵目をほぼ10m間隔に設定し、遺物の包含状態や遺構の分布について確認した。つぎに昭和54年度に試掘調査を実施した箇所を中心に、3ヶ所について部分的な発掘地区的拡張を行なった。古くから畠耕作により地層が相当攪乱されており、遺物包含層はほとんど残っていない。遺構も調査区やや西寄りの36～38-20～23Gで2ヶ所検出されただけである。さらに幾つかの地点について、2m四方を単位とする追加の坪掘りを行なったが、ここでも遺構や遺物は発見されなかつたため、それ以降の拡張は打ち切った。最終的な発掘面積は、粗掘り地区も含めて500m²である。

7月1日より同4日まで、遺構の精査および平面・断面図等の図面作成と細部写真の撮影を行ない、7月4日に本遺跡の全調査を終了した。

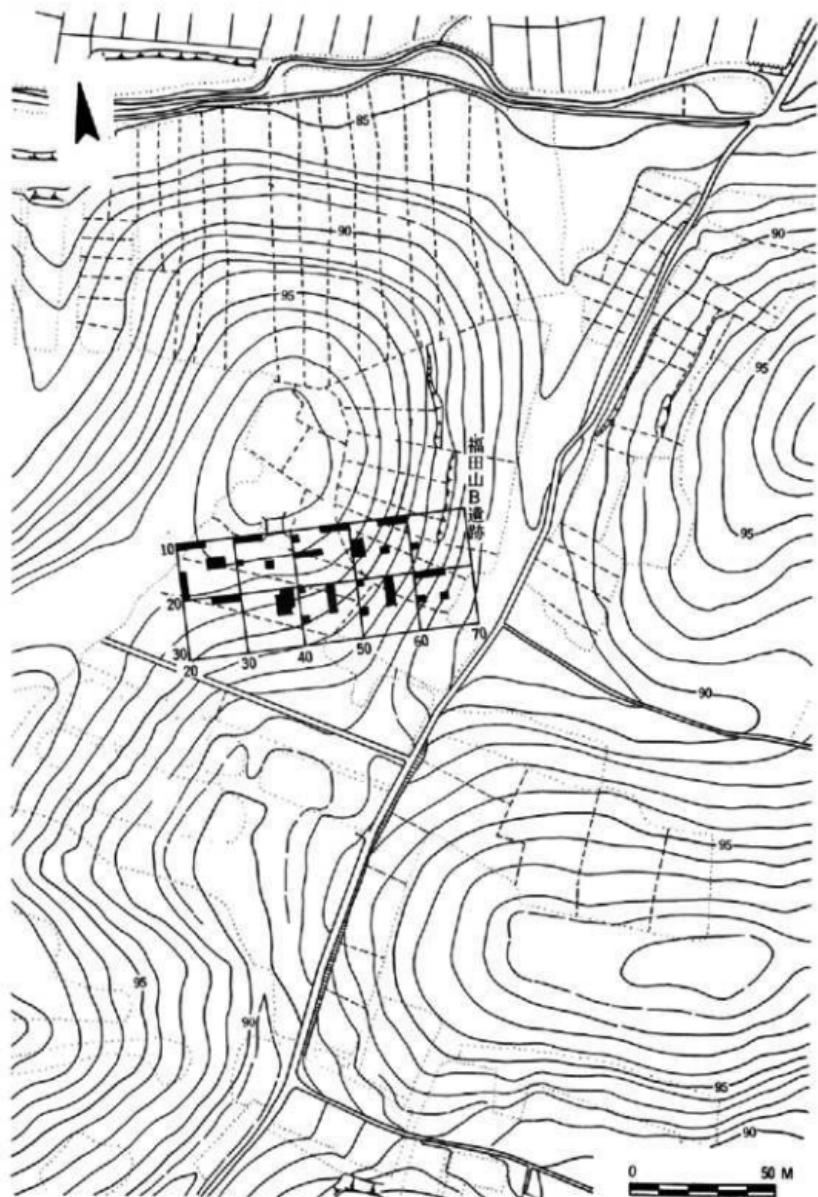
2 遺跡の層序（第17図、図版14）

今回の発掘地区が丘陵上の西斜面にあたるため、地層は北から南ないし西から東側にかけてゆるやかな傾斜を示す。

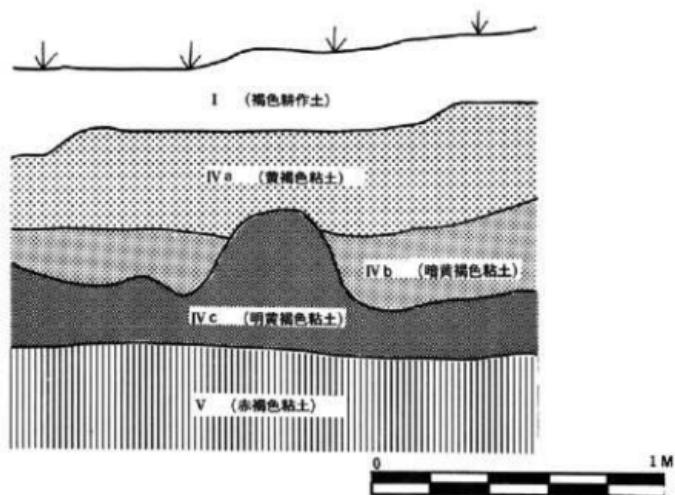
発掘区の東側55-20～24G西壁で確認した本遺跡の基本的な層序は、つぎのとおりである。第I層が褐色耕作土で厚さが18～26cm、第II層が黒褐色微砂で厚さが10～16cm、第III層が明褐色粘質土で厚さが8～10cm、第IV層が黄褐色粘土層となる。第IV層は地山の無遺物層で、第III層が第II層から第IV層への漸移層である（図版14）。

発掘区西側から中央部にかけては、第II・III層がほとんどみられず、第I層の耕作土からすぐ第IV層の地山に達する。

発掘区西端の25-14G西壁で、第IV層以下をさらに110cm程掘り下げたところ第17図のような断面観察を得た。第IV層が粘土粒子の密度や色調から厚さ75cm程の中で3つに細分され、さらにその下に第V層とした灰白色凝灰岩粒を含む硬い赤褐色粘土層が堆積する。第IV層以下には石器も含め遺物はまったく認められない。



第15図 福田山B遺跡全体図



第16図 25-14G 西壁土層セクション

3 発見された遺構（第19図、図版15）

調査区やや西寄りの36~38-23Gで土壌が2基検出されている。

1号土壌

36-23Gで検出された不整円形の土壌である。南北検出径72cm、東西径57cm、深さ6~14cmを測る。第IV層黄褐色粘土を掘り込んでおり、壁はややゆるやかに立ち上る。底面は鍋底状を呈し、比較的軟かい。

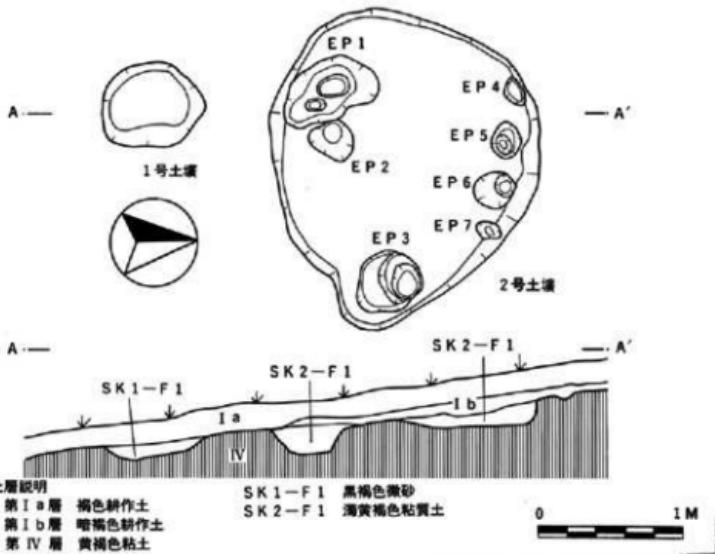
覆土は黒褐色微砂の单一土層で、遺物の出土は認めない。

2号土壌

36-37-21-22Gで検出された不整円形の土壌である。南北径186cm、東西最大径219cm、深さ6~20cmを測る。壁は第IV層を6~14cm掘り込んでおり、ややゆるやかに立ち上る。底面は北から南側にかけて幾分傾斜を持ち、しまりが弱い。

土壌の壁に添って4個、やや内側に3個のピットが発見された。このうちE P 1・2は底面からの深さが最深部で25cmと深く、他のピットは10cm内と浅い。堅穴住居跡の可能性も考えられるが、規模が小さいことや床面が安定していないことなどから土壌とした。

覆土はピットの埋土も含め、濁褐色粘質土の单一土層である。遺物は土壌の中央やや東寄りの覆土中から、石器の剝片が1点出土している。



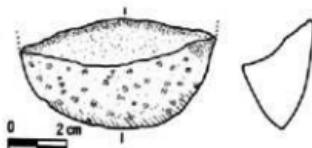
第17図 1・2号土壙平面図

4 出土した遺物 (第19図、図版15)

福田山B遺跡の西側および中央部は、第II・III層がまったく残っておらず、また遺跡東側の第II・III層が比較的よく残っている場所でも明確な遺物包含層はなかった。

今回の発掘調査で発見された遺物は、発掘区南西部28-20G第II層から磨製石斧が1点(第19図、図版15)、2号土壙の覆土からフレイクが1片出土しただけである。磨製石斧は刃部だけの破片である。石材は花崗岩の一種を利用し刃部が蛤刃状に両面から研磨されている。刃部先端はやや丸味を呈するが、全体の形は不明である。2号土・出土のフレイクは、硬質頁岩を利用した長さ2.5cmの小さな縦長剝片で、調整痕や使用痕などは認められない。このほか発掘地区的東側から縄文土器の細片が1点表面採集されている。器厚が薄手で、LR縄文が表面にみえるが、詳細は不明である。

福田山B遺跡のうち、今回の発掘区の北側からは、昭和50年の分布調査時に縄文土器が数片発見されており、遺跡の中心地は北側にあるものと推定される。



第18図 磨製石斧実測図

V 仁間磯ノ沢B遺跡

1 調査の経過（第19図、図版16・17）

仁間磯ノ沢B遺跡は、福田山丘陵の東・南側斜面および西側斜面の丘陵底部にかけて立地する。地目は畠地および雑木林で、遺跡より一段下の南側低地は良好な水田になっている。丘陵の北西部から裾部にかけて工業団地関連の道路が通るため、遺跡の南側を中心に調査を実施した。発掘地域の範囲は、東西140m、南北100mになる。

調査期間は、5月29日から始まり、一時中断期間を置いて7月29日までである。調査ははじめ 2×8 mのトレンチをほぼ10m間隔に設定し、遺物の包含状態や遺構の分布について確認した。つぎに遺物や遺構が比較的よくみられた三地点を中心に、6月17日から一部重機械を用いて拡張し、遺構検出および精査を実施した。これを便宜的に東区(70~78-45~50G)、中央区(40~53-16~25G)、西区(15~18-36~45G)と呼ぶこととする。

精査は7月7日から東区→中央区・西区→東区の順序で行ない、7月29日までに図面作成や全体写真も含めてすべて終了した。各地区とも斜面の裾部添いに遺物や遺構がみられるが、遺物包含層はきわめて薄い。最終的な発掘面積は、900m²である。

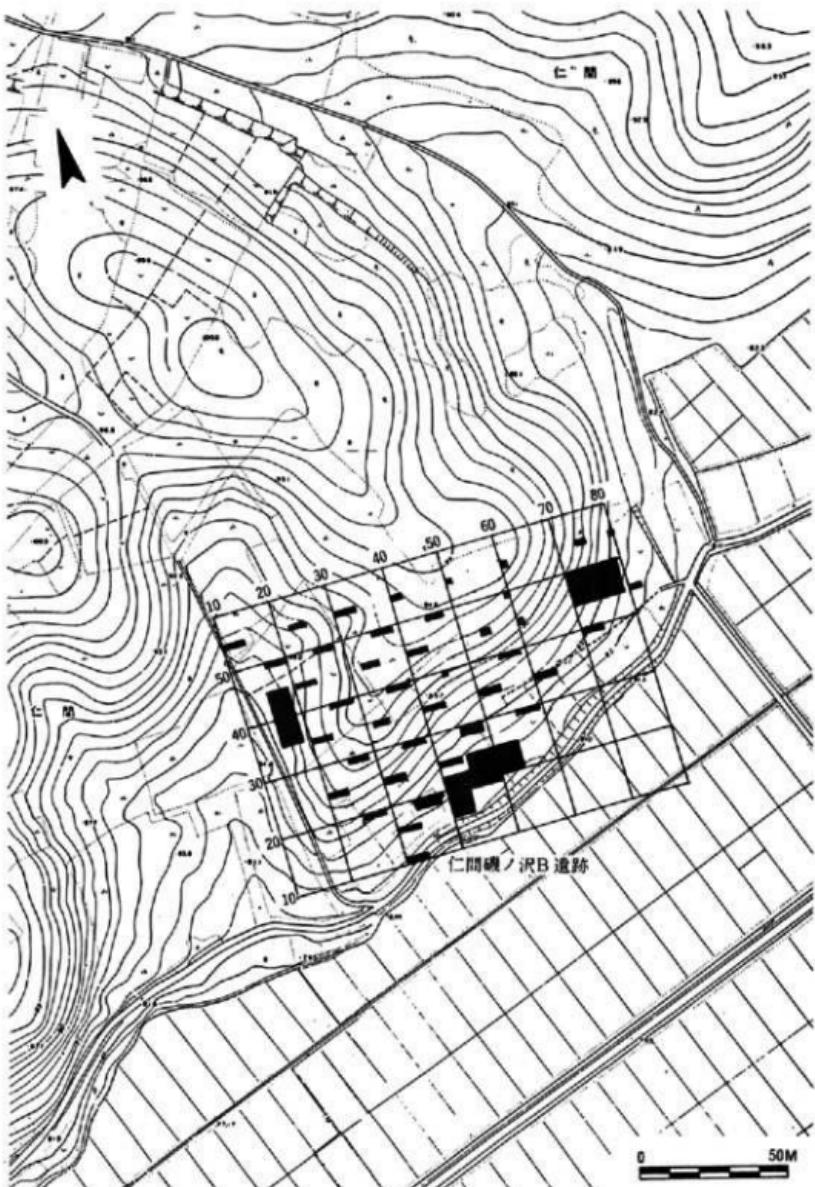
2 遺跡の層序（第20図、図版18）

今回の発掘地区が丘陵の南ないし西斜面にあたるため、地層は北から南ないし東から西側にかけてゆるやかな傾斜を示す。

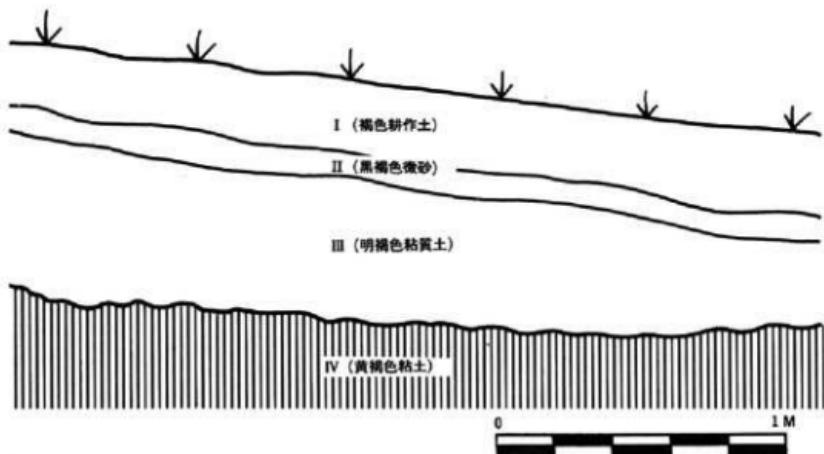
中央区の北側41-42-25G北壁で確認した本遺跡の基本的な層序は、つぎのとおりである（第20図）。第I層が褐色耕作土で厚さが12~30cm、第II層黒褐色微砂で厚さが10~18cm、第III層が明褐色粘質土で厚さが20~50cm、第IV層が黄褐色粘土層となる。第IV層は地山にあたる無遺物層で、第III層が第II層から第IV層への漸移層である。なお第I層とした耕作土は、地点によって近年の耕作土（第Ia層）と旧耕作土（第Ib層）に分けられる。

発掘区北側の丘陵部は、第II・III層がほとんどみられず、第I層の耕作土ないし雑木の腐植土層からすぐ第IV層の地山に達する。東区・中央区・西区の3地区とも、斜面に下るにつれて第II層が深くなり、最深部では40cmに達する（図版18）。逆に第III層とした黄褐色粘土粒を混じる漸移層は、斜面が下るにつれてやや薄くなる傾向を示す。

遺物は、第II層および第III層から出土するが、両層とも必ずしも純粹な遺物包含層とはいせず、その中に地点によって遺物を含む所と含まない所があるようである。総じて遺物は、丘陵裾部下端の第II層から多く出土する。



第19図 仁間磯ノ沢B遺跡全体図



第20図 41・42-25G 北壁土層セクション

3 遺構・遺物の分布（第21図、図版17・19・20）

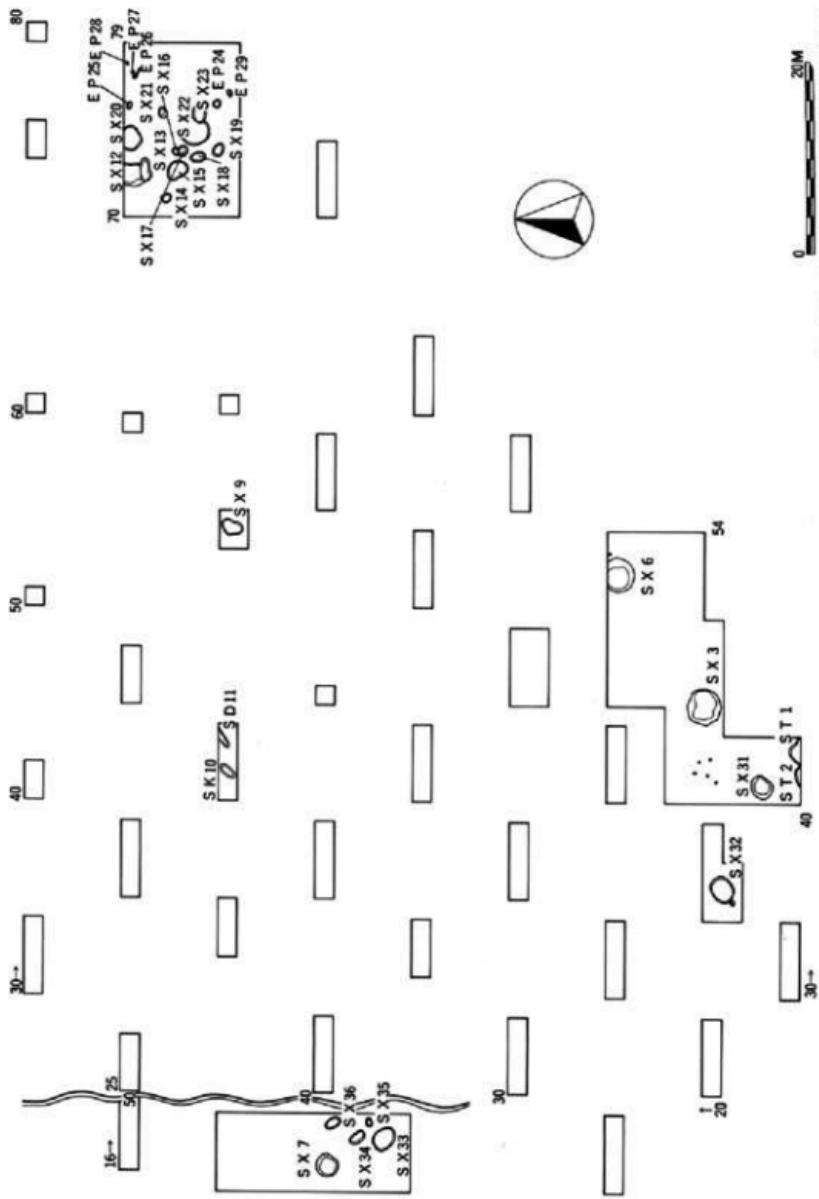
仁間磯ノ沢B遺跡から出土した遺物には、縄文土器・須恵器・石器などがある。遺物はとくに中央区南端や東区南半など丘陵裾部の第II層黒褐色微砂から多く出土するが、中央区北側の45~48-30Gなどでは第III層明褐色粘質土からやまとまって出土している。

発掘区北側の丘陵部や西区からはほとんど遺物が出土しないが、発掘区北西隅にあたる15~34-45~55Gでは、石鏃や搔器・磨石などの完成された石器（第30図1・2、第29図2）が散発的に出土している。また発掘区中央北寄りの9号落ち込みからは、縄文土器が3片（第27図5、第28図4・7）出土している。

発掘調査によって検出された遺構には、堅穴住居跡2棟、土壙3基をはじめ性格不明の落ち込みや溝跡などがある。時期は縄文時代早期後葉から同前期初頭頃に比定できるものが大半であるが、縄文時代中期中葉や平安時代に比定できる遺物も微量ながら出土しており、今後調査区外にこれらの時期の遺構が発見される可能性もある。

遺構は、標高83~86mラインの等高線に添つた形で分布し、とくに東区に多く認められた。本遺跡でもう一つ注目されるのは、第21図の遺構配置図で「SX」とした、黒褐色微砂が粘土層下に深く落ち込んでいる遺構の存在である。これらは第4節で後述するように風倒木痕の一種と考えられる。

第21図 仁間磯ノ沢B道跡遺構配置図



4 発見された遺構

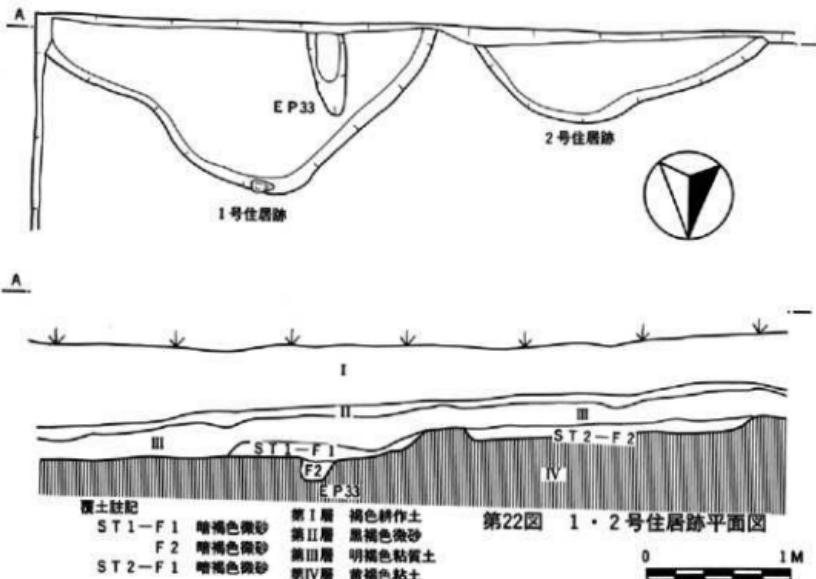
1・2号住居跡（第22図）

中央区南西隅40～43-16Gで検出された2棟の竪穴住居跡で、南半分が発掘区との関係で未検出である。遺構確認面は第IV層黄褐色粘土の直上である。平面形が二つとも不整の隅丸長方形ないし橢円形を呈すると思われるが詳細は不明である。1号住居跡の東西検出径2.63m、南北検出径1.13m、2号住居跡の東西検出径1.92m、南北検出径0.56mを測る。

1号住居跡の壁は、第IV層を10～20cm掘り込んでおり、ゆるやかに立ち上る。床面は東側がやや深く傾斜する。住居跡の覆土は2層に分けられ、覆土1層が風化礫を含む軟らかい暗褐色微砂、同2層がしまりのある暗褐色微砂である。周溝や炉などは認められない。

2号住居跡の壁は、第IV層を8～10cm掘り込んでおり、ややゆるやかに立ち上る。床面は東に幾分傾斜しているが、比較的しまりが強い。住居跡の覆土は、軟らかい暗褐色微砂の単一土層である。柱穴や周溝・炉などの施設はとくに認められない。

遺物は、1号住居跡の覆土1層から不定形石器や使用痕のある剝片（第30図12～14）をはじめ繊維を含む縄文土器片（第27図7・8）が発見されている。また2号住居跡の覆土1層からは不定形石器（第30図10）が1点発見されている。遺物からみて、1・2号住居跡の時期は、縄文時代早期末葉頃に位置付けられる。



発掘地域の東端にあたる東区からは、土壤をはじめ性格不明の落ち込みなどが密集して検出されている。平面形が円形ないし楕円形を呈し、大きさも直径2mを超すものから50cm内外のものまで多様である(第24図、図版20)。これらの遺構は、壁や底面の掘り込み状態および覆土のあり方などから、大きくつぎの4類に分けられる。

第1類

平面形が直径40~80cmのほぼ円形をなし、覆土がしまりをもち粘土ブロックを混じえない小形のピットである。E P 24~29が本類にあたる。覆土が2層に分かれ、上層がしまりのある暗褐色微砂、下層が粘土粒を少量含む明褐色の粘質土である。遺物は認められない。

第2類(第24図4・5・8)

平面形が径90~185cmの円形ないし楕円形を呈し、覆土が軟らかく粘土ブロックを混じえないものである。S X 16~18・21・23が本類にあたる。覆土は2層からなり、上層は黒褐色微砂、下層は軟らかい暗褐色微砂で、共に遺物は認められない。底面が不安定なことも考え合せ、かなり新しい時期の木根や耕作の擾乱によるものと考えられる。

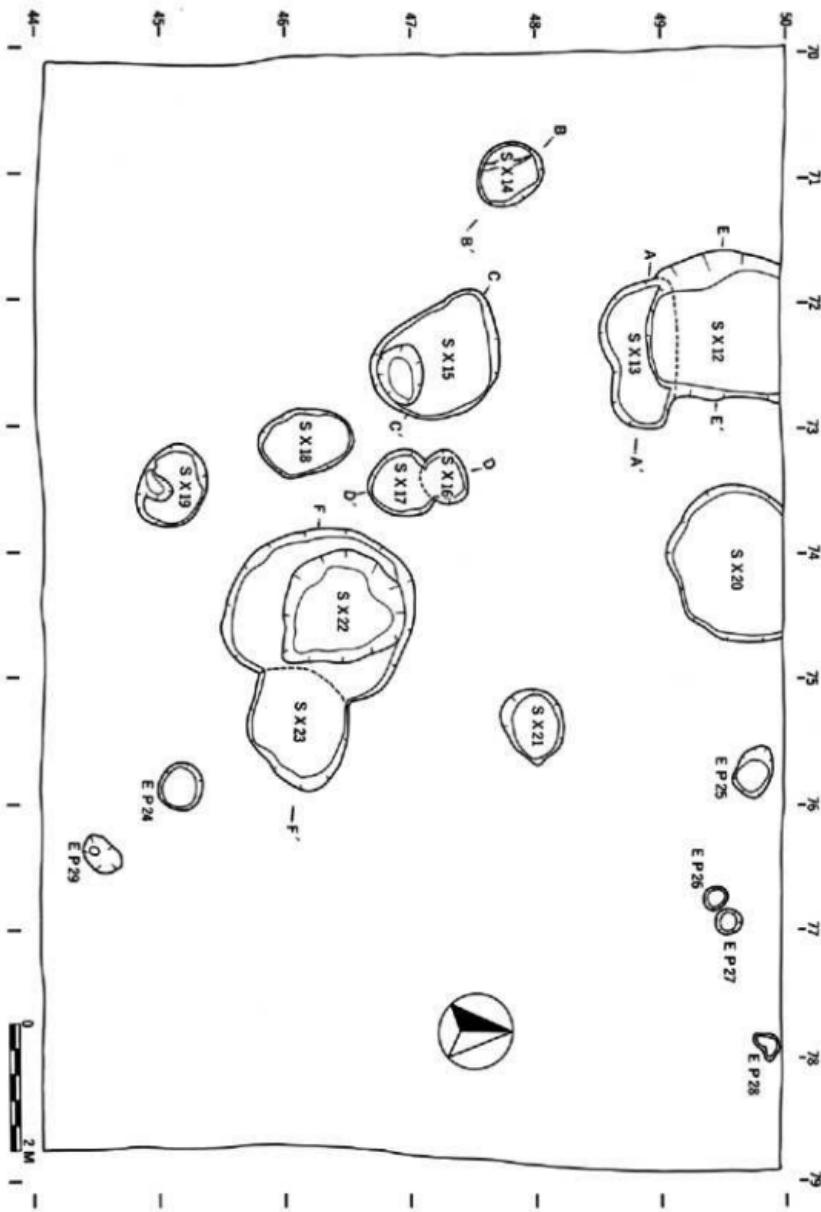
第3類(第24図1~3)

平面形が長径110~230cmの楕円形を呈し、覆土が軟かく粘土ブロックを部分的に含むものである。S X 13~15・19が本類にあたる。覆土は上下方向の重なりが著しく、底面が比較的平坦である。遺物は認められない。本類もかなり新しい時期の木根や耕作の擾乱によるものと考えられる。

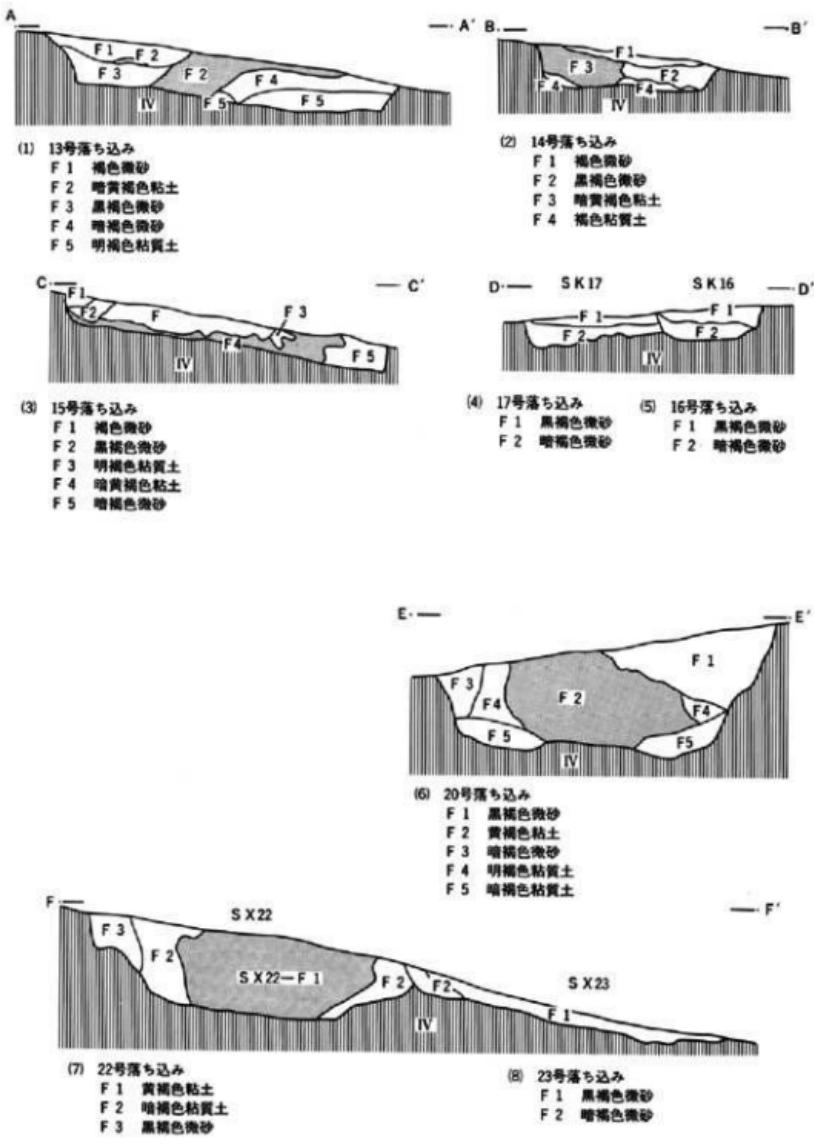
第4類(第24図6・7)

平面形が長径210~300cmの不整円形ないし不整楕円形を呈し、粘土ブロックをまだら状に含む暗褐色粘質土が黄褐色粘土の下層に入り込んでいるものである。12・15・20・22号落ち込みが本類にあたる。深さが110~165cmと深く、12・22号落ち込みのように2類ないし3類の遺構によって切られているものもある。遺物は、22号落ち込みの覆土3層から縄文土器片(第28図2・3・8~11)や石器(第29図2・5・6、第30図11)がやまとまつて出土している。

本類に属する落ち込みの大きな特徴は、落ち込み中央部の充填土層に第IV層に近似した黄褐色粘土を有することである。この「再堆積ローム」ともいえる堆積土は、落ち込みが形成される段階ないし落ち込みの廃絶後に人間の手によって再堆積されたものと考えるよりは、落ち込みの底面および壁面方向からの自然の營力によって第IV層の黄褐色粘土が上面に浮いたものと考える方がより妥当であり、最近はこれを「風倒木痕」とする説(文献6)が有力になってきている。仁間磯ノ沢B遺跡からは、東区以外からもこの種の落ち込みが発見されており、つぎにもう少し詳しく触れてみる。



第23図 東区地質配置図



第24図 12~17・22・23号落ち込み平面図

風倒木痕について（第25・26図、図版21・22）

仁間磯ノ沢B遺跡からは、風倒木痕と考えられる落ち込みが東区で4基(S X 12・15・20・22)、中央区で4基(S X 3・6・31・32)、西区で2基(S X 7・33)、発掘区北側で1基(S X 9)の計11基検出されている。ある意味では、本遺跡の主たる遺構ともいえるものであり、つぎにその特徴について述べる。

(1) 分布と遺構確認面

風倒木痕と考えられる落ち込みは、前述のように仁間磯ノ沢B遺跡の発掘区域ほぼ全面にわたって分布するが、9号落ち込みを除いて他の10基はすべて丘陵裾部の緩斜面上、標高83～86mラインの等高線に添った形で立地する。落ち込み間の間隔は4～15mと一定していない。

遺構確認面は、ほとんどが第IV層黄褐色粘土の直上であるが、3号落ち込みだけは第II層黒褐色微砂の上面で確認した。遺構の重複関係は、風倒木痕と考えられる落ち込み同士ではみられないが、12・22号落ち込みはかなり新しい時期と思われる土層の攪乱した遺構によって切られており、ごく近年のものとは考えられない。

(2) 平面形

直径2.5～3.5mの不整円形を呈するものがほとんどであるが、9・12・15号はかなり不整の橿円形状を示す。

(3) 壁・底面

落ち込みの壁は、ほとんどが第IV層の地山を掘り込んでおり、壁の一部と底面が第V層赤褐色粘土に達するものもある。ただし3号落ち込みだけは、第II層から掘り込みがみられ、第III層を経て底面が第IV層に達する。

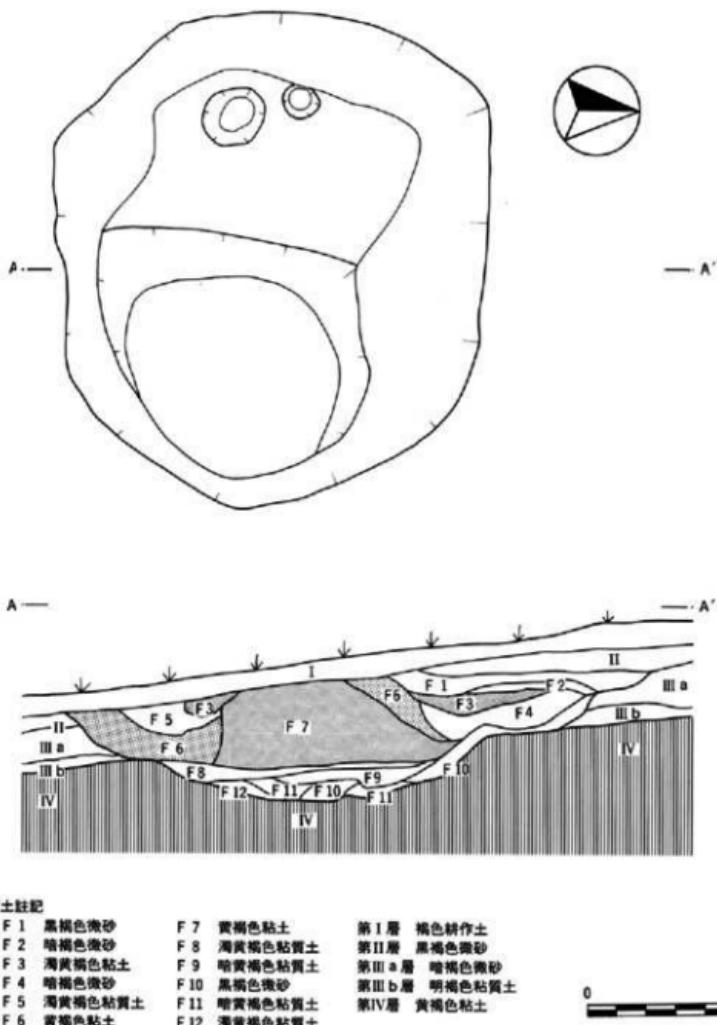
底面は、丸味を持つ鍋底状を呈するもの(3・22号)、平坦で平底を呈するもの(9・12号)、凹凸が著しいもの(6・7・20・31～33号)がある。壁と底面との境界は明瞭でない。壁や底面は細部をみれば一様に凹凸が著しく、人為的に踏み固められた痕跡は認められない。

(4) 覆土の状態

落ち込みの覆土は、3～6層の比較的単純なものと、10層を超える複雑なものとがあるが、ここでは3・9・31号落ち込みの土層観察をもとに堆積土の状態についてみてみる。

3号落ち込みは、精査中央区44・45-20・21Gにあり、平面形が長径3.34m、短径2.97mの不整橿円形を呈する。壁は第II層から掘り込まれ、底面までの深さが80cmに達する。

同落ち込みの覆土は12層に細分されるが、覆土3・5～8層が地山の粘土の浮き上った



第25図 3号落ち込み平面図

もので、覆土4・9・10層がその間隙に流れ込んだ腐植土、覆土11・12層が底面や壁面の風化したものと推定される（第25図）。覆土3・5～8層が再堆積ロームともいえる堆積土であるが厚さが60cm近くもあり、人間の手によって再堆積されたものと考えるよりは、落ち込みの底面および壁面からの自然の営力によって第IV層が上面に浮いたものとみられる。

9号落ち込みは、発掘区北側53・54-44・45Gにあり、平面形が長径2.32m、短径1.46mの北東隅が張り出した不整梢円形を呈する。壁は第IV層から掘り込まれ、下面が第V層赤褐色粘土におよぶ。遺構検出面から底面までの深さは、最深部で50cm近くになる。

同落ち込みの覆土は6層に細分されるが、覆土2・4層が地山の粘土の浮き上ったもので、覆土5層がその間隙に流れ込んだ腐植土、覆土6層が壁面の風化したものと考えられる（第26図）。

31号落ち込みは、中央区40・41-16・17Gにあり、平面形が長径2.51m、短径2.15mの不整梢円形を呈する。壁は第IV層直上から掘り込まれ、底面までの深さが75cmに達する。

同落ち込みの覆土は6層に細分されるが、覆土3～5層が地山の粘土の浮き上ったもので、覆土6層がその間隙に流れ込んだ腐植土と考えられる（第26図）。落ち込みの南側が長径85cm程の梢円状に深く落ち込む。

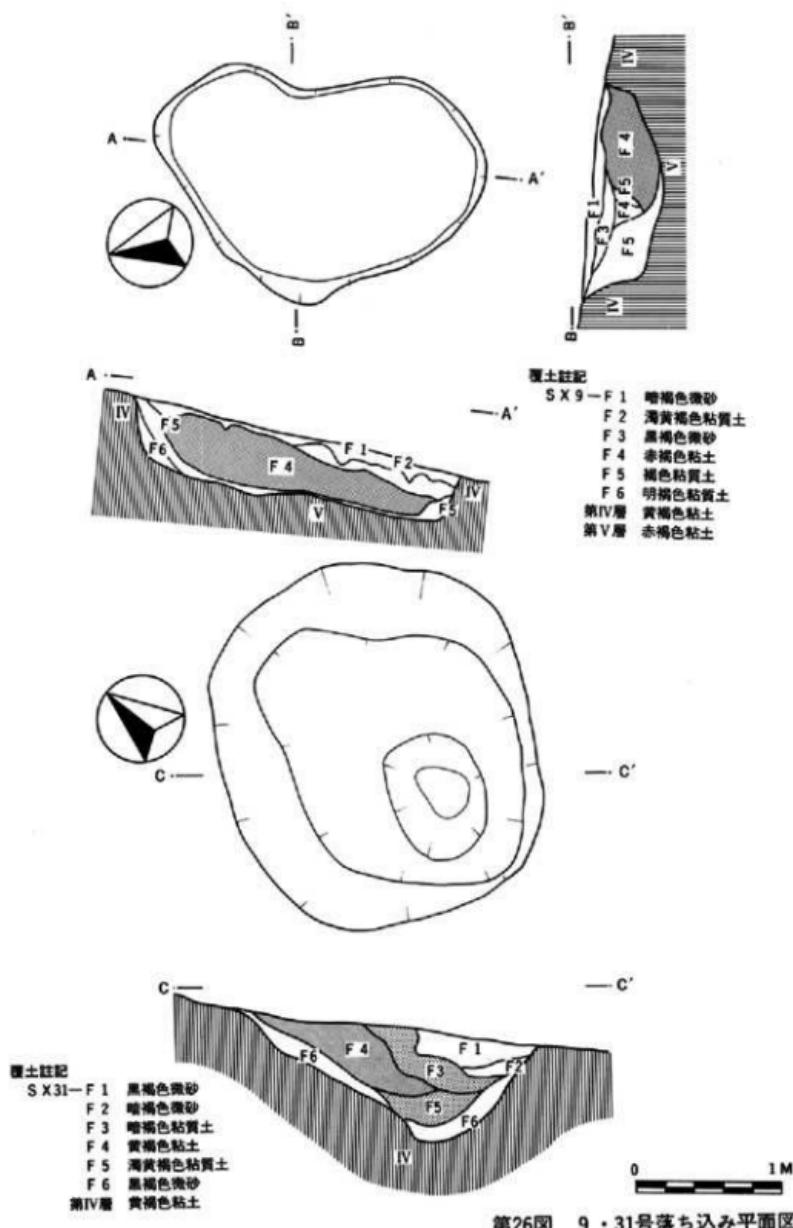
（5）出土遺物

仁間磯ノ沢B遺跡で検出された11基の風倒木痕と考えられる落ち込みのうち、覆土とした堆積土中から明らかに遺物が発見できたものは、3・9・22・31号落ち込みの4例のみである。

3号落ち込みの覆土1層からは、縄文時代早期末葉に属する縄文土器2片（第27図5・11）と不定形石器と箋状石器が各1点（第30図3・7）出土している。9号落ち込みの覆土1層からは、縄文時代早期中葉から同前期初頭に属する縄文土器が2片（第27図5、第28図4）出土している。22号落ち込みは本遺跡の中でもっとも遺物が多く出土しており、覆土3層から縄文時代前期初頭に属する縄文土器（第28図2・3・8～11）や石器（第29図2・5・6、第30図11）などがある。31号落ち込みの覆土1層からは、不定形石器が1点出土している（第30図9）。

いずれも風倒木の作用によって浮き上ったと考えられる地山粘土層の上面に位置し、風倒木痕と考えられる落ち込みよりは時期的にやや新しい頃のものである。ただし平面プランの検出段階では、流れ込みによるものと考えられる腐植土の落ち込みの輪郭が顕著で、遺物包含層による独立した遺構プランは認め得なかった。

つぎにこれらの形成された時期であるが、遺物が出土した落ち込みについては、縄文時代早期中葉から同前期初頭以前ないし同じ頃と考えられる。



5 出土した遺物

(1) 土 器 (第27・28図、図版23~25)

仁間磯ノ沢B遺跡から出土した土器は、細片を含め約70片と少ない。これらの土器は大きく4群に分けられ、さらに各土器群は幾つかの小類に細分される。第II章福田山B遺跡の土器と分類記号を共通にしたため、分類記号に若干の空白を生じる。具体的には第V群土器が欠落し、新たに第IV群土器が加わる。

第I群土器

貝殻文・沈線文を主な施文の特徴とする土器群で、2類に細分される。

a類 表面に貝殻条痕文を有する深鉢形土器の体部片で、やや厚手の土器である(第27図1~4)。石英などの細粒子を多く含み、纖維の混入はみられない。

b類 口縁部がやや彎曲をもつ器形で、文様は口縁部端に1条の横走沈線がありその下に弧状の平行沈線を有する(第27図5)。口縁部裏面に2条の貝殻腹縁圧痕が認められる。

第II群土器

縄文時代早期後半の縄文施文を特徴とする土器群で、2類に細分される。

a類 上げ底風を呈する厚手の平底の底部の類で、体部下端に斜縄文が施されている(第27図6)。胎土には纖維を多く含んでいる。

b類 斜縄文ないし羽状縄文が施されている深鉢の体部片のうち、やや厚手で、胎土に纖維を多く含むものである(第27図7~16)。口縁部の形態は不明である。平底でや上げ底風の底部も1点出土している(17)。

第III群土器

丸底一羽状縄文を基本とする縄文時代前期初頭に位置付けられる土器群で、4類に細分される。

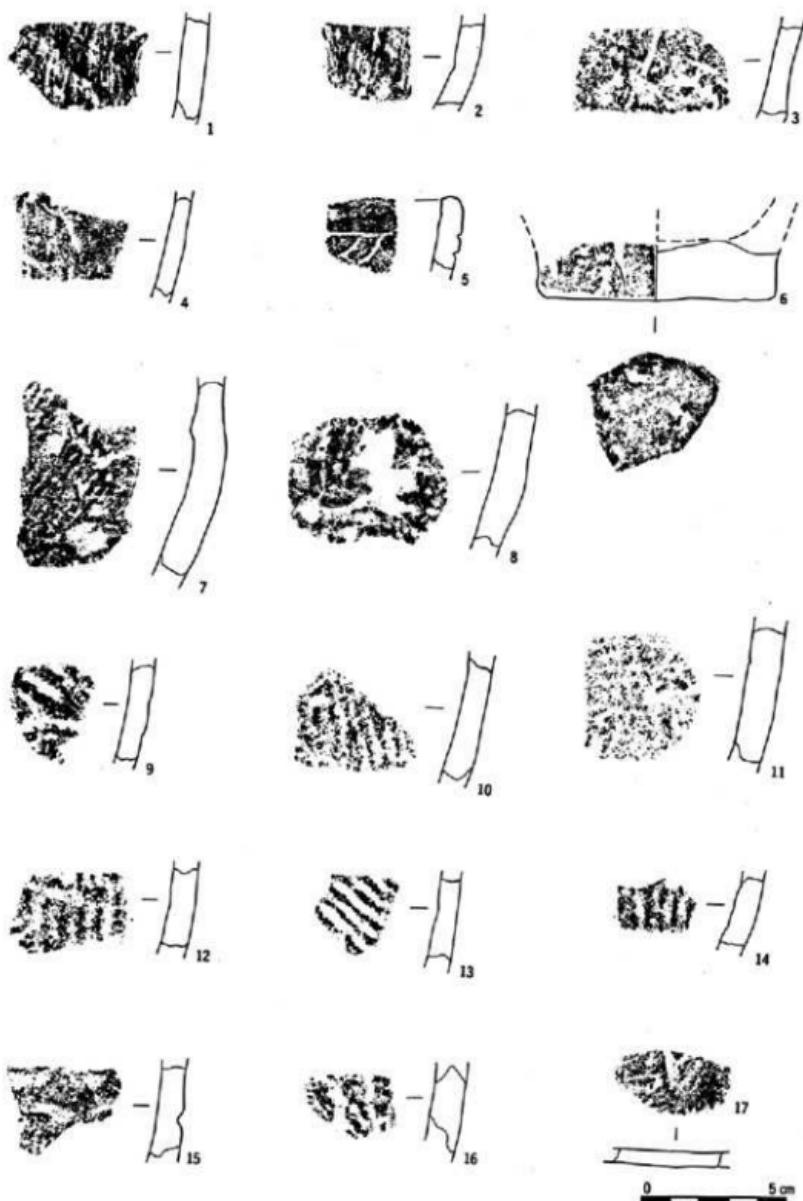
a類 口縁部の隆起帶上に、縄の末端部を連続刺突させている類で、体部には羽状縄文が施されている(第28図1~5)。胎土に纖維を多く含んでいる。

b類 斜縄文を施している土器で、前群に比べ筋が細くち密な縄文である(第28図6~7)。比較的薄手で、胎土に纖維の混入は認められない。

c類 縦方向の粗い撚糸文を施している土器である(第28図8~16)。比較的厚手で、胎土に纖維を多く含んでいる。22号落ち込みからややまとまって出土した。

d類 平坦口縁で全面にループ文を施している土器である(第28図17)。比較的薄手で胎土に纖維を多く含んでいる。

本群土器に相当する底部片はみられない。



第27図 仁間磯ノ沢B遺跡土器拓影図 (1)

第IV群土器

頸部に粘土隆帯を有する縄文時代中期の土器群で、1片だけ出土している。

a類 頸部の粘土隆帯上に箆状工具による縦位の連続刺突文、体部上半に縦方向の無節結節回転縄文を有する土器である(第28図18)。

(2) 石 畚 (第29・30図、図版26~28)

仁間磯ノ沢B遺跡からは剥片も含め25片の石器が出土しているが、そのうち調整痕ないし使用痕が認められるものは、第29・30図に示した20点である。

出土地点は、第30図1が17-44G第II層、2が36-50G第II層、3・7が3号落ち込み覆土1層、4が42-25G第III層、5が76-45G第III層、6が36-20G第II層、8が45-30G第II層、9・10・12~14が1号住居跡覆土1層、11・第29図2・5・6が17号落ち込み覆土1層、第29図1が51-35G第II層、第29図3が72-46G第III層、第29図4が6号落ち込み覆土1層である。

打製石器は、石材がすべて硬質頁岩で、器種として石鎌・石槍・搔器・箆状石器・不定形石器・使用痕のある剥片などがある。つぎに各器種毎に製作技法等について述べる。

石鎌 (第30図1)

1点出土している。尖頭部が細長い二等辺三角形を呈する凸基有茎形のものである。1a・1b面とも丁寧な押圧剥離が施されている。

石槍 (第30図5)

尖頭部分のみ1点出土している。両面調整の石槍であるがとくに先端部の加工が著しい。搔器 (第30図4・6)

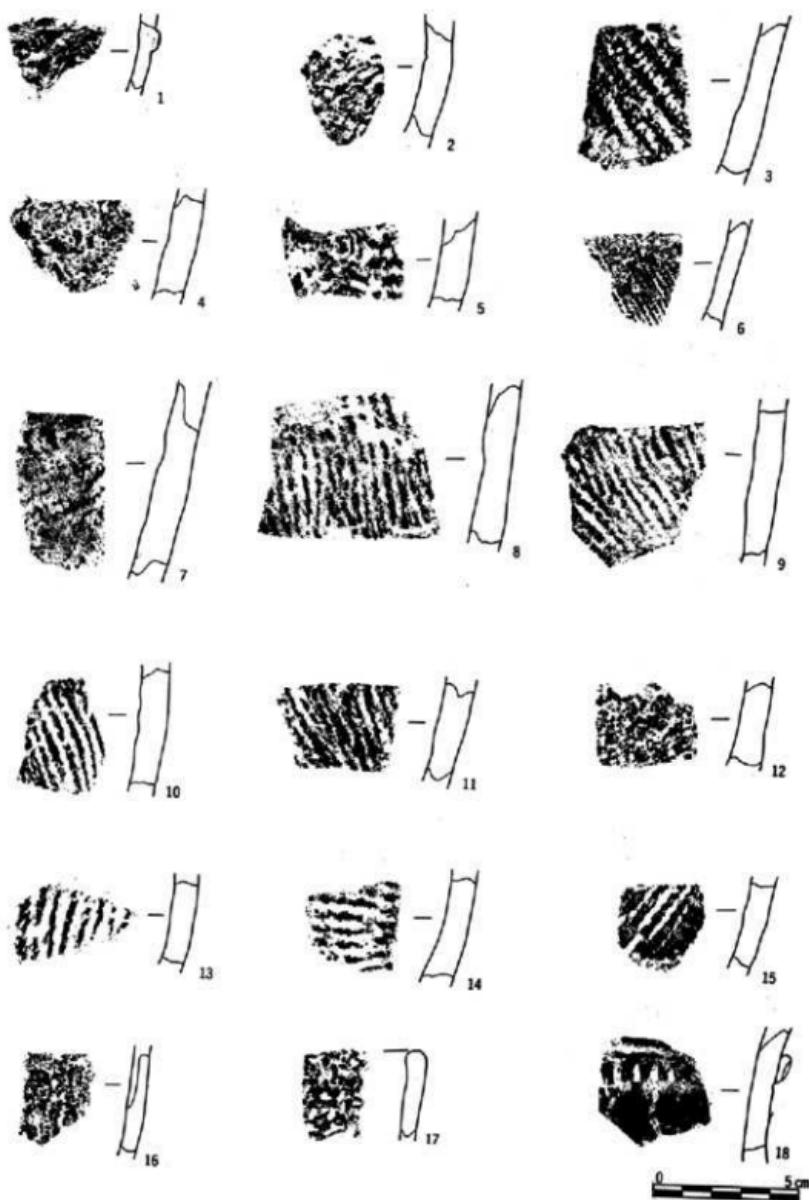
縦長剥片の刃部先端周辺に両面からの調整を施し、急角度の刃部を作り出しているものである。4はa面の右半分が欠損する資料で、b面から、急角度の楕状剥離によって弧状を描く刃部を形成している。6は基部上半が欠損している。

箆状石器 (第30図7)

両側縁に両面からの刃潰し調整を有し、先端部を刃部として利用するものである。7a面の頂部に柄づれとも思われる磨滅痕が認められる。基部先端は欠損の可能性が強い。

打製石斧 (第30図8)

断面が凸レンズ状を呈する厚手の剥片の両面に粗い二次調整を施している打製石斧状の石器で、上半部が欠損している。8bに表皮を残し、8a面先端部に打撃痕によるとみられる細い剥離痕を有する。



第28図 仁間磯ノ沢B遺跡土器拓影図（2）

不定形石器（第30図2・3・9～12）

縦長ないし横長剥片の一部に二次調整を施して刃部を形成している不定形の石器で6点出土している。a面右側に刃溝しと思われるb面からの調整を有し、反対側を刃部として使用しているもの(2・3・9)と、剥片の一部に簡単な二次調整を有するだけのもの(10～12)との二種がある。10の下端両面にはタール様の付着物が認められる。

使用痕のある剥片（第30図13・14）

明瞭な二次加工をもたない縦長剥片の一部に、使用の際生じたとみられる微小剝離痕のみみられるもので2点出土している。

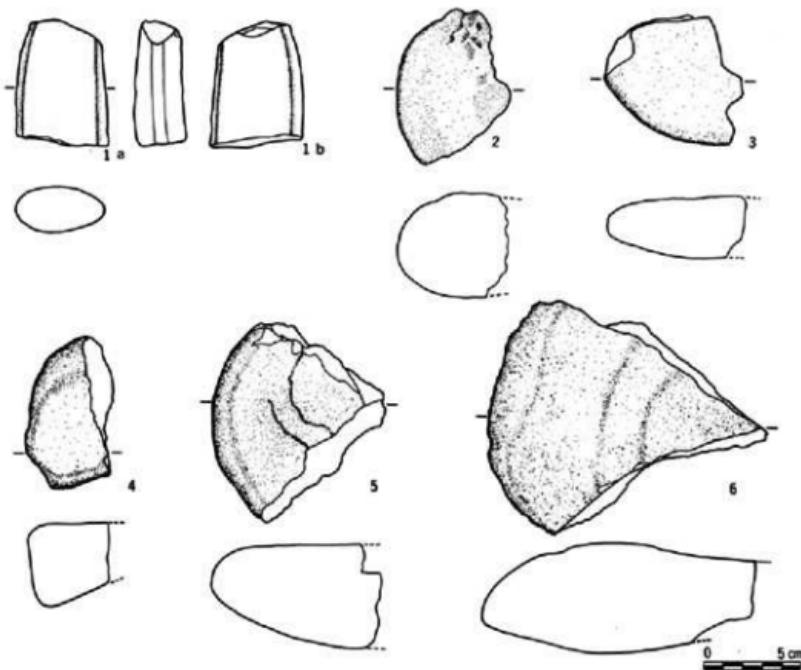
磨製石器は、石材が砂岩と花崗岩の二つがあり、器種として石皿・磨石がある。

石皿（第29図5・6）

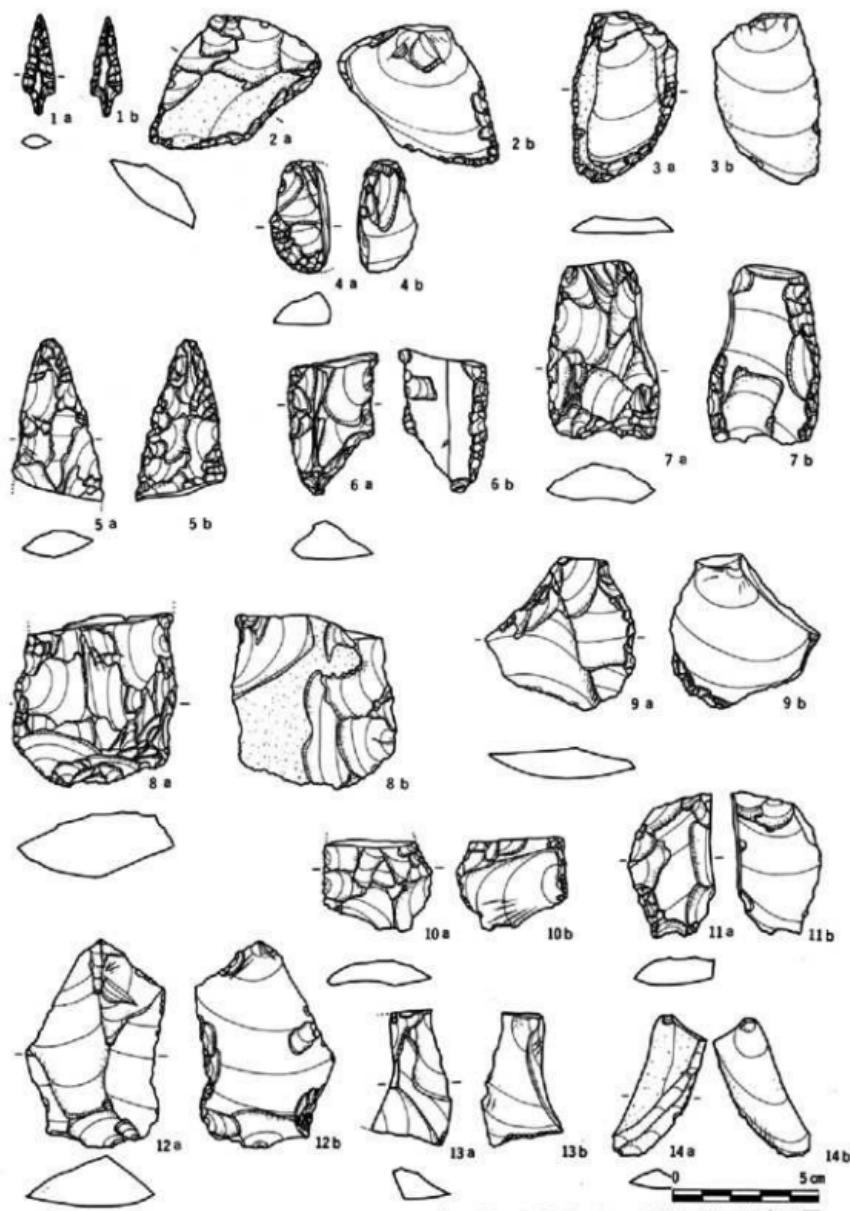
石皿の一部が2点出土している。二つとも中央に向ってやや窪んだ磨面を有する。

磨石（第29図1～4）

楕円形ないし円形の河原石の1～3面に磨耗痕を有するもので4点出土している。



第29図 仁間磯ノ沢B遺跡磨製石器実測図



第30図 仁間磯ノ沢B遺跡打製石器実測図

VI　まとめ

1　遺物について

新庄中核工業団地に關係する福田山A・福田山B・仁間磯ノ沢B遺跡から出土した土器は、3遺跡を合せ約140片と少ない。これらの土器は、福田山A・仁間磯ノ沢B遺跡の遺物の節で触れたようにV群に大別され、さらに各土器群は幾つかの小類に細分される。本節では遺構内を含む各土器群について、概略的な編年上の位置を考えてみる。

第I群土器とした貝殻文・沈線文を主な施文の特徴とする土器群のうち、a類とした口唇部に貝殻腹縁圧痕文、口縁部の表裏面に貝殻条痕文を有する土器は、縄文時代早期「吹切沢式」以後ムシリ式に至る前の条痕文土器の範疇に含まれるものと思われる。またc類とした口縁部表面に平行沈線文、裏面に貝殻腹縁圧痕文を有する土器は、同早期「ムシリI式」に類似する。b・d類とした胎土に植物纖維を含まない条痕文系の土器も細片ではあるが、ほぼa類ないしc類に併行するものと想定される。

第II群土器とした胎土に纖維を含む粗い縄文が施されている土器は、全体的に縄文時代早期後半に位置付けられる。底部は上げ底ないし張り出した平底を示し、口縁部形態は不明である。東北地方北半で「早稻田5類」とされているものに一部類似するが、資料が少ないためなお詳しい検討は保留しておきたい。

第III群土器とした丸底一羽状縄文を基本とする土器群は、全体として縄文時代前期初頭に位置付けられる。このうちa類の口縁部の隆起帯上に縄の末端を連続刺突させている土器は、青森県長七谷地貝塚の報告書（文献3）で第III群土器c類とされたものに類似する。県内では飯豊町野山遺跡（文献9）に類例がみられる。a類と同様に胎土に纖維を多く含み全面にループ文を施しているd類は、東北地方南半で「上川名II式」、関東地方で「花積下層式」と呼ばれているものにあたる。

c類とした胎土に纖維を多く含み外面に縦方向の粗い撚糸文が施されている土器は、從来あまり知られていないものであるが、酒田市飛島遺跡では条痕文土器と併出しており（文献9）、また前述の青森県長七谷地貝塚で第IV群土器b類とされたものに類似する。類例が少なく明確な時期決定は困難であるが、仁間磯ノ沢B遺跡22号落ち込みで第III群土器a類と併出していることから本群に含めておく。この他b類とした胎土に纖維を含まず節が細くち密な縄文を有する土器も、口唇部上端を平滑に整形していることや青森県長七谷地貝塚で第IV群土器f類としたものに類似することなどから第III群土器に含めた。ただし第III群土器c類は、なお縄文時代早期後半にまで遡る可能性もある。

第IV群土器とした頸部の粘土陸帯上に竪状工具による縦位の連続刺突文、体部上半に縦方向の無節回転縄文を有する土器は、縄文時代中期中葉東北南部でいう「大木7b式」に比定される。

第V群土器とした縦走ないし横走するR L縄文を有する土器は、全体として弥生時代に位置付けられる。小片がほとんどで明確な時期決定は困難であるが、口縁部に2条、頸部に1~2条の平行沈線を有する壺ないし浅鉢形土器などから、弥生時代中期頃に比定できると思われる。弥生時代中期の土器は、村山地方や置賜地方ではかなり明確な様子を示すが、新庄市などの最上地方では不明な点が多い。第V群土器としたものも地文としての縄文の施文手法や器形などは、東北南部というよりはむしろ秋田県や青森県などの東北北部的な様相が強い。

2 遺構について

発掘調査によって検出された遺構としては、福田山A遺跡で堅穴住居跡1棟と土壙5基および風倒木痕4基、福田山B遺跡で土壙2基、仁間磯ノ沢B遺跡で堅穴住居跡2棟と土壙3基および風倒木痕11基などがある。つぎに福田山丘陵の3遺跡を通して遺構の変遷を概観しまとめとしたい。

福田山丘陵に人々が明確な生活跡を残しているのは、縄文時代早期末葉からである。それ以前の後期旧石器時代等の遺構は、福田山丘陵の北西部に立地する丸森A・丸森B遺跡からスクレイパーなどの遺物が発見されているものの、遺構は検出されていない。

風倒木痕と考えられる落ち込みを除いて、3遺跡の中でもっとも古い時期に属する遺構は仁間磯ノ沢B遺跡1号住居跡である。その西隣りにある2号住居跡も土器は出土しなかつたが覆土等からみてほぼ同じ時期のものと考えられる。福田山A遺跡からは縄文時代早期中葉から末葉にかけての土器片や石器が少量出土しているが、明確な遺構はみられない。

つぎの縄文時代前期初頭の遺構には、福田山A遺跡23号住居跡・1号土壙と同A区11号土壙がある。A区11号土壙は陥穴と判断されるもので、この時期の集落の場と狩猟の場との有機的なつながりが想定される。なお仁間磯ノ沢B遺跡や、今回の調査対象には含まれなかつたがその東脇にある仁間磯ノ沢A遺跡からも当該期の遺物が出土しており、今後さらに遺構が増える可能性が強い。

縄文時代前期初頭以降同中期中葉までは、遺構・遺物ともまったくみられない。中期中葉の遺物は、仁間磯ノ沢B遺跡の発掘区中央北側で土器や石器が少量出土しているだけで、遺構は認められない。ただし福田山丘陵西端にある清水遺跡からは、前期中葉から中期中葉にかけての遺物が数多く表面採集されている。

縄文時代中期中葉以降弥生時代中期までの時期も、遺構や遺物がまったくみられない。弥生時代中期に属する遺構としては、福田山A遺跡の5号と27号の2つの土壙があげられる。両土壙とも、土壙の形態や覆土に炭化粒子ないし焼土を含むことなどから、この時期の土壙基の一種と考えられる。

弥生時代中期以降は、仁間磯ノ沢B遺跡中央区南西端で発見された、平安時代の須恵器の時期まで遺構・遺物ともみられない。須恵器は杯形土器の体部小片1点のみなので、今回の報告書では割愛している。また福田山A遺跡3号土壙では、人骨片を含む墓壙が1基検出されている。時期は不明であるが、第II層より土壙を掘り込んでいることなどから、江戸時代ないし近代のものと推定される。

最後に風倒木痕と考えられる落ち込みについて触れておきたい。仁間磯ノ沢B遺跡および福田山A遺跡で検出された、黒褐色微砂ないし暗褐色微砂が粘土層下に薄く入り込むこの種の落ち込みは、自然の営力による風倒木によって引き起こされた痕跡と考えてほぼ誤りがないであろう。ただし仁間磯ノ沢B遺跡では遺物の出土地点が少なく、その中の4ヶ所が風倒木痕とみられる落ち込みの覆土内からであるという事実は、風倒木痕の後に新しい掘り込みがあった可能性をも含めて再吟味の必要がある。

主要参考文献

- 1 山形県教育委員会 1977『分布調査報告書—新庄福田工業団地関連遺跡—』山形県埋蔵文化財調査報告書第11集
- 2 長沢正機 1978『山屋A遺跡発掘調査報告書』新庄市教育委員会報告書5
- 3 青森県教育委員会 1980『長七谷地貝塚』青森県埋蔵文化財発掘調査報告書第57集
- 4 霧ヶ丘遺跡調査団 1973『霧ヶ丘』
- 5 山形県教育委員会 1977『主要地方道尾花沢・寒河江線道路改良工事発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第9集
- 6 能登 健 1974『発掘調査と遺跡の考察—いわゆる「性格不明の落ち込み」を中心として—』信濃第26巻3号
- 7 青森県教育委員会 1980『板留(2)遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第59集
- 8 山形県教育委員会 1981『分布調査報告書(8)』山形県埋蔵文化財調査報告書第44集
- 9 柏倉亮吉他 1969『山形県史資料11篇 考古資料』

図 版



図版 1 新庄中核工業団地全景
(新庄市開発室提供)



図版2 福田山A遺跡
上：発掘風景
下：遺跡近景



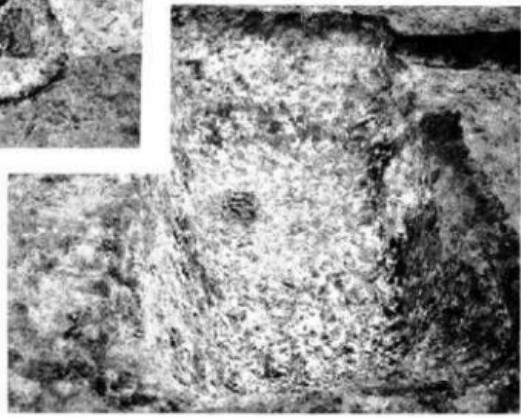
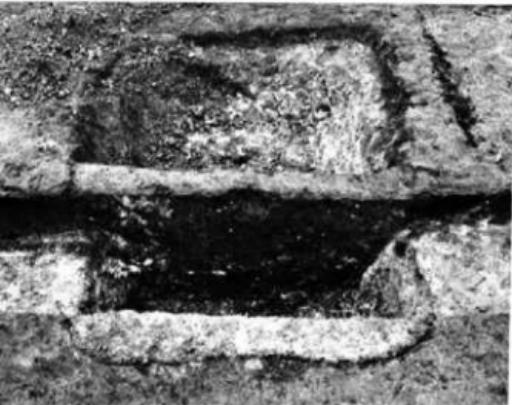
图版3 福田山A遺跡
上：西区遺構分布状况



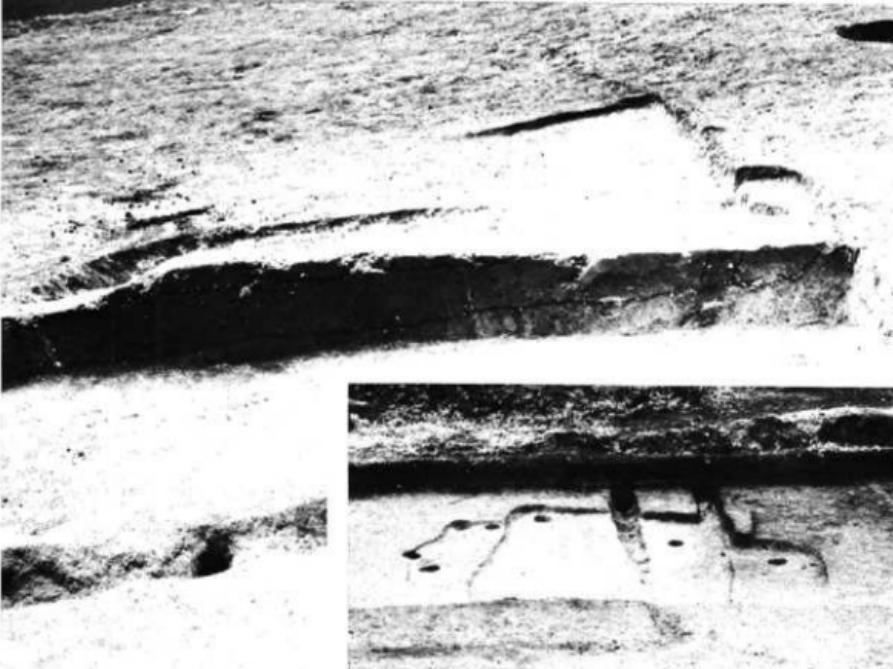
図版4 福田山A遺跡
上：4号土壤土層セクション
下：8号落ち込み検出プラン



図版5 福田山A遺跡
上：5・27号土塙遠景（東より）



図版 6 福田山 A 遺跡
上：3号土壤平面プラン
中：同 土層断面
下：同 完掘状況



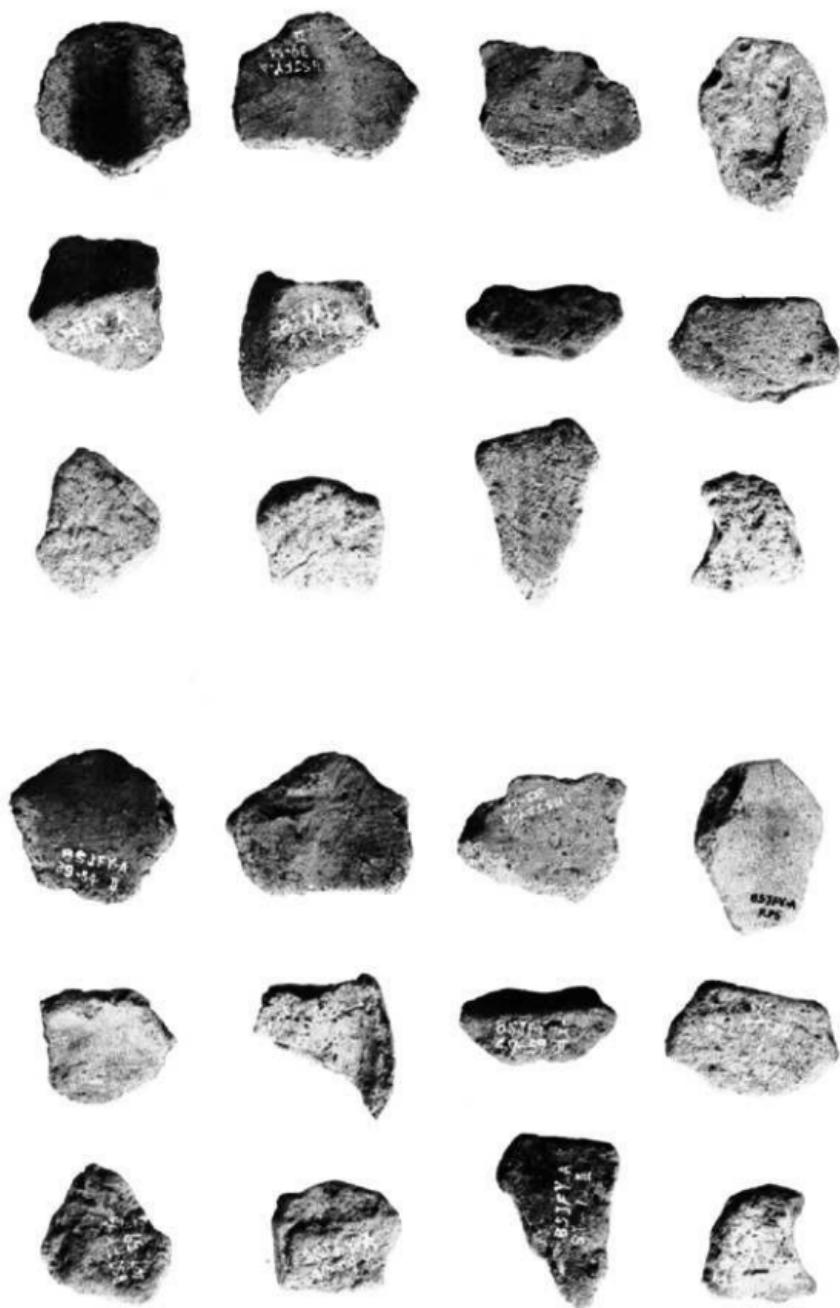
図版7 福田山A遺跡

上：23号住居跡近景（同 全景）

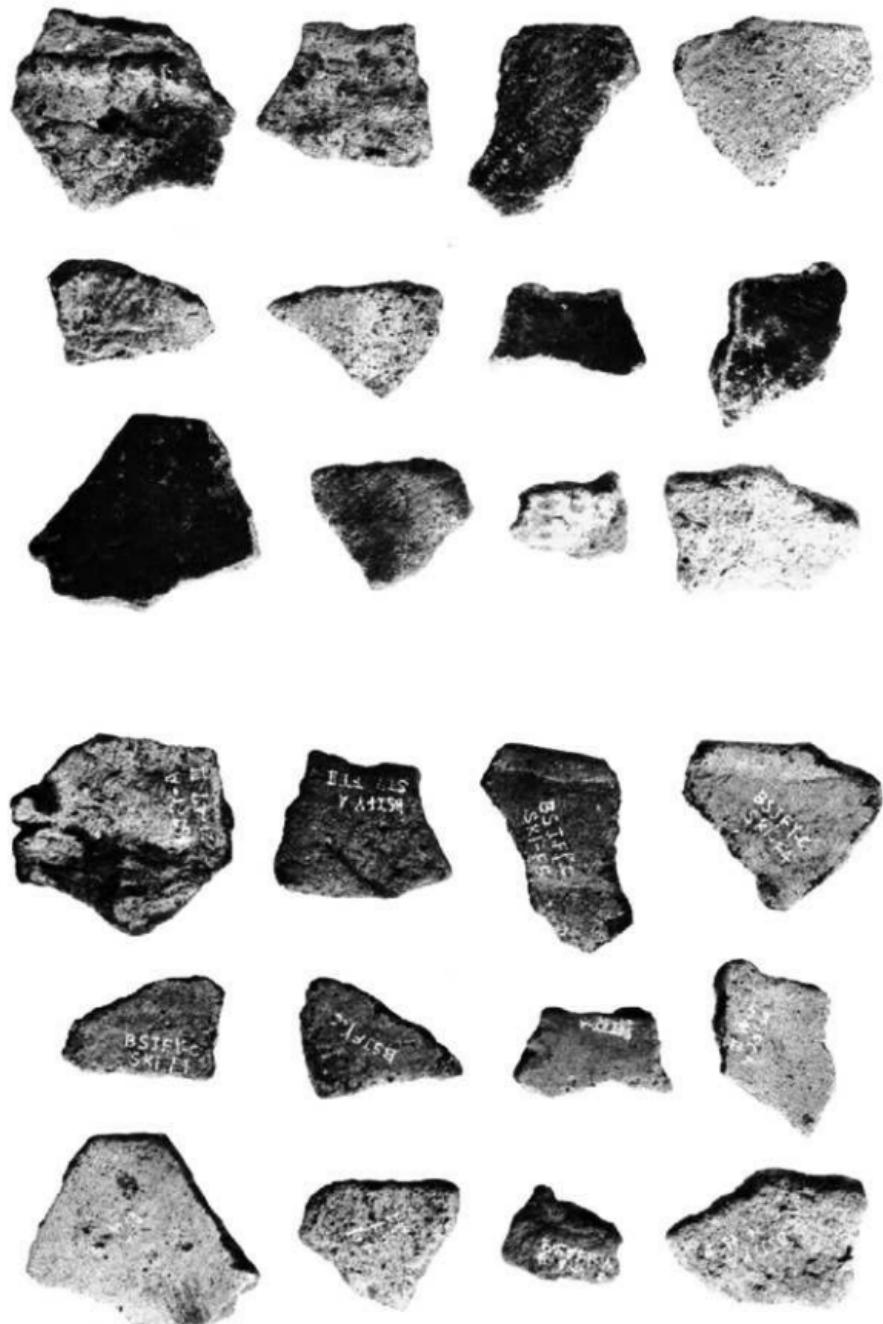
下：現地説明会風景



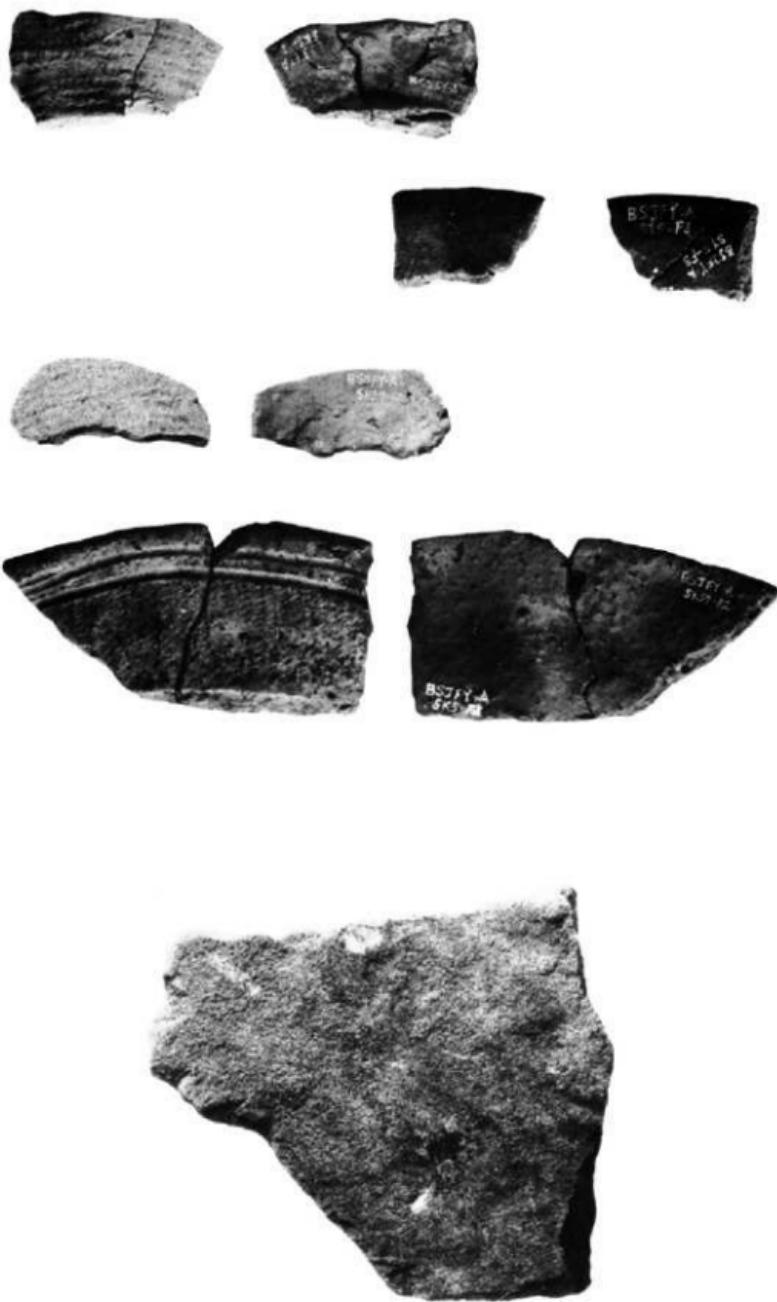
図版 8 福田山 A 遺跡
上：A 区発掘風景
下：11号土壙近景



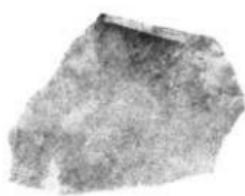
図版9 福田山A遺跡
上：第I～II群土器（表面）



図版10 福田山A遺跡
上：第III群土器（表面）
下：第III群土器（裏面）



圖版11 福田山A遺跡
上：第V群土器



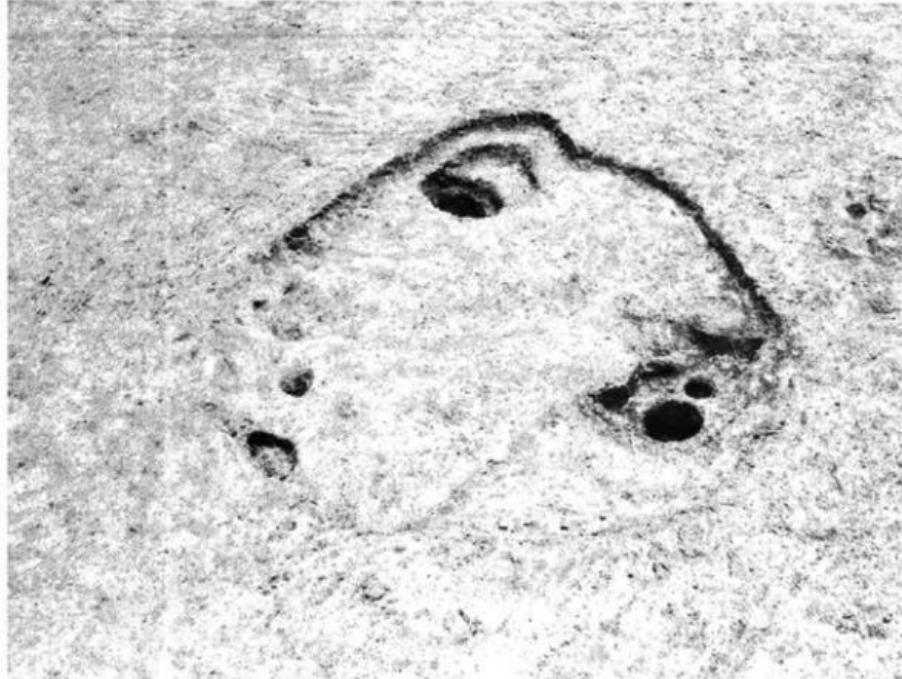
図版12 福田山A遺跡 打製石器



図版13 福田山B遺跡
上：遺跡遠景（1）
下：遺跡遠景（2）



図版14 福田山B遺跡
上：25-14G 西壁土層セクション
下：55-20~24G 土層セクション



图版15 福田山B遺跡
上：2号土壤全景



図版16 仁間磯ノ沢B遺跡

上：遠景（1）

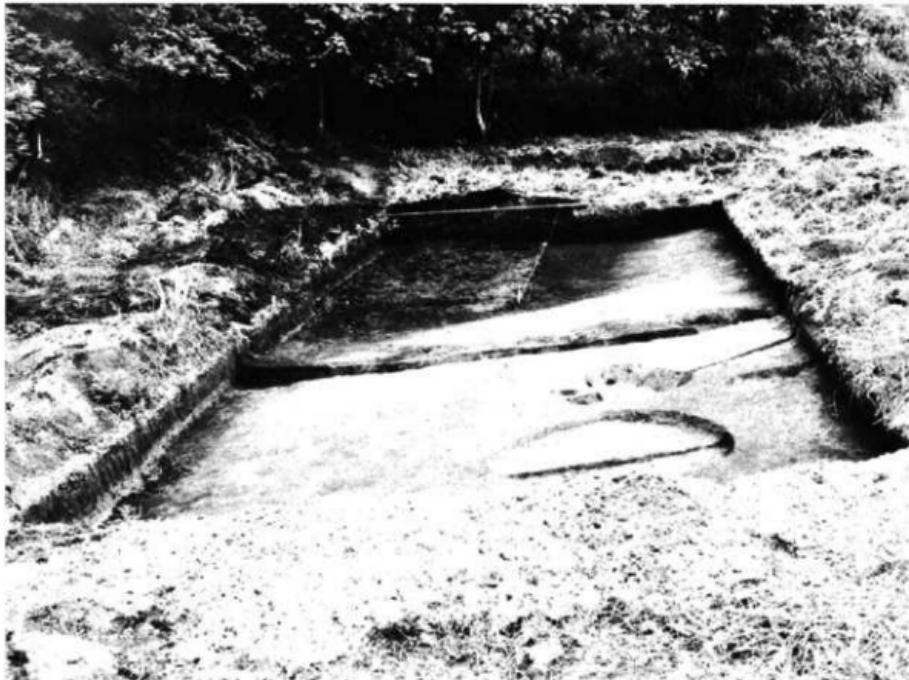
下：遠景（2）



図版17 仁間戦ノ沢B遺跡
上：発掘風景



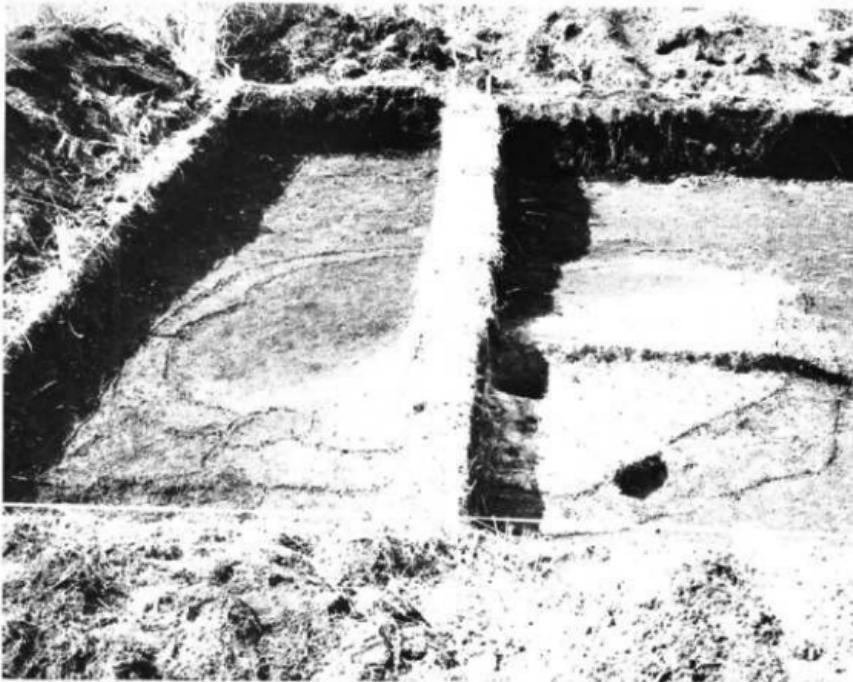
図版18 仁間磯ノ沢B遺跡
上：34・35-20G南壁土層セクション
中：71・72-47G北壁土層セクション
下：40・41-25G北壁土層セクション



図版19 仁間磯ノ沢B遺跡
上：西区全景
下：2号墓と入り口近景



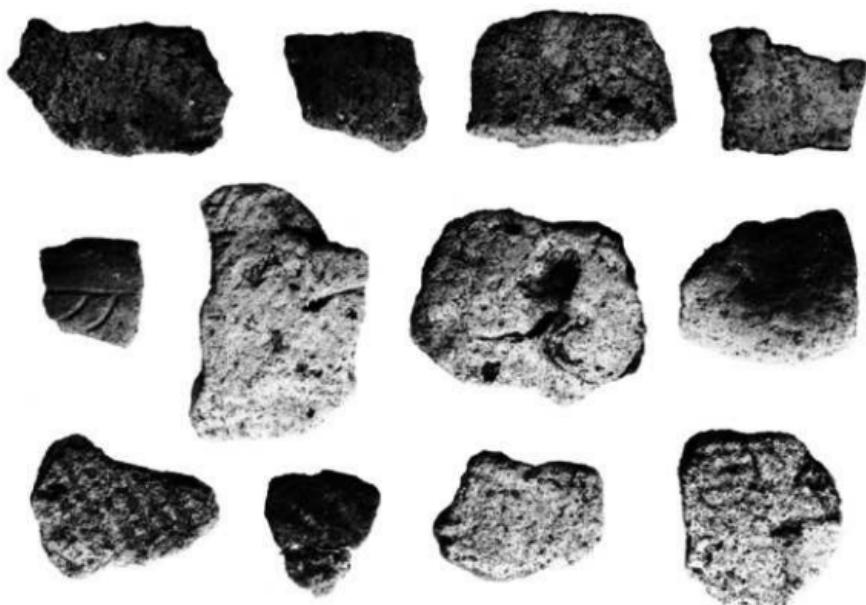
図版20 仁間磯ノ沢B遺跡
上：東区発掘風景
下：東区遺構検出状況



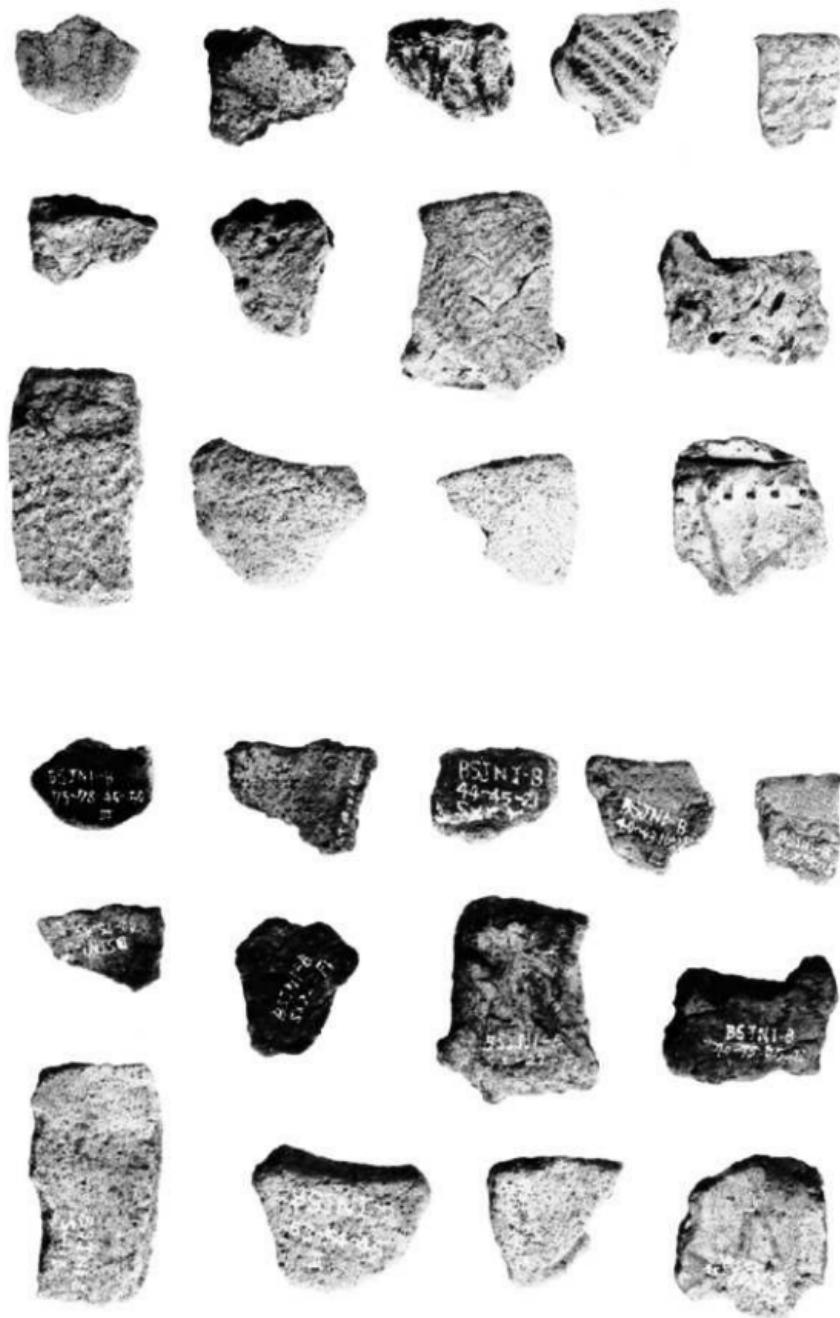
図版21 仁間磯ノ沢B遺跡
上：3号落ち込み平面プラン



図版22 仁間磯ノ沢B遺跡
上：9号落ち込み平面プラン
下：9号落ち込み土層セクション



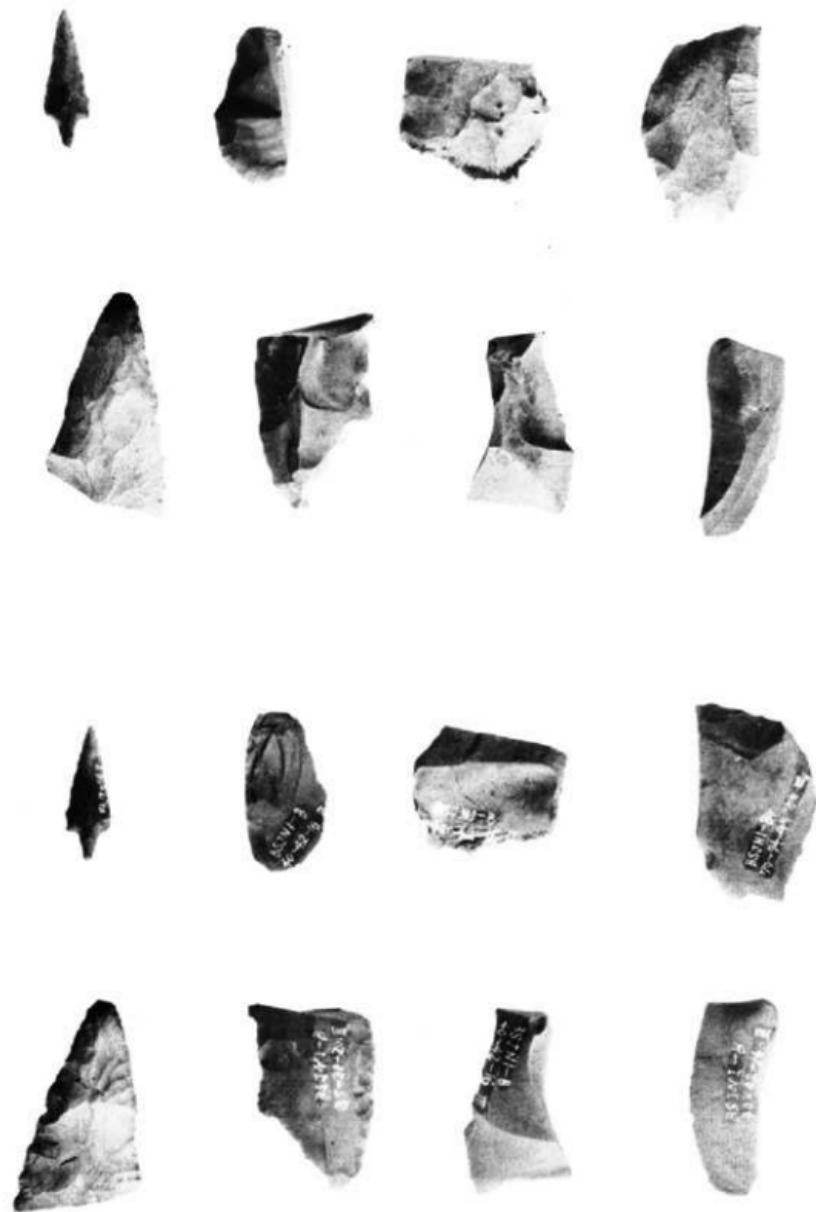
図版23 仁間磯ノ沢B遺跡
上：第I～II群土器（表面）



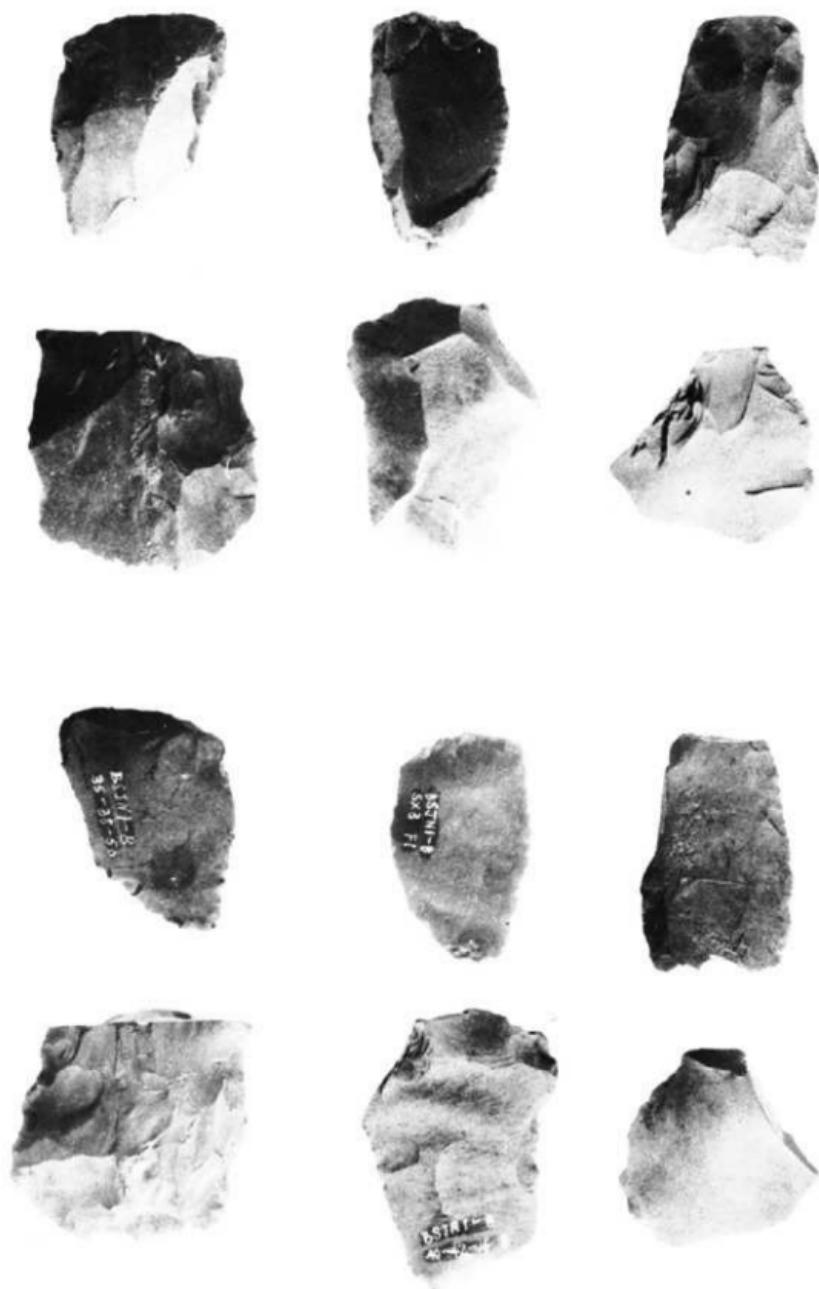
図版24 仁間磯ノ沢B遺跡
上：第II～IV群土器（表面）
下：第II～IV群土器（裏面）



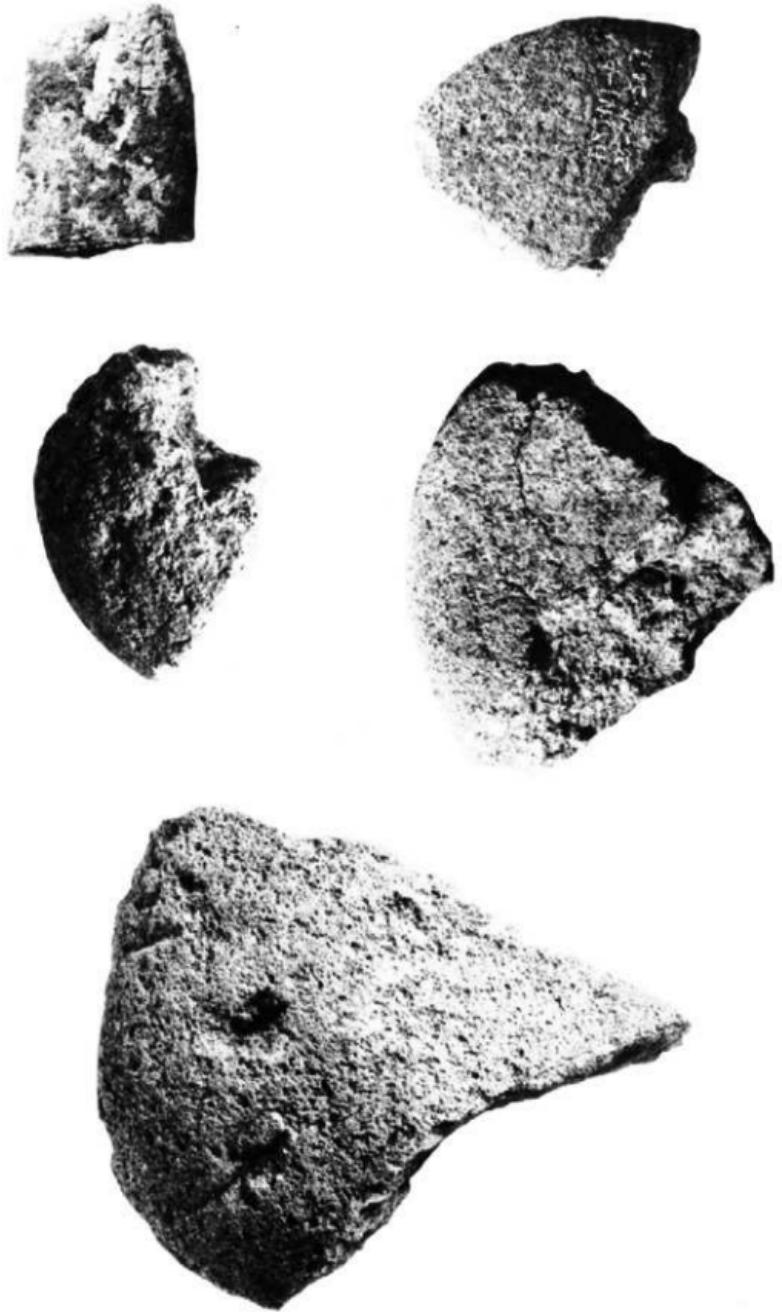
図版25 仁間磯ノ沢B遺跡
上：第III群土器（表面）



図版26 仁間磯ノ沢B遺跡
上；打製石器 I (表面)
下；打製石器 I (裏面)



図版27 仁間磯ノ沢B遺跡
上：打製石器II（表面）



図版28 仁間磯ノ沢B遺跡 磨製石器

山形県埋蔵文化財調査報告書第43集

新庄中核工業団地関連遺跡
発掘調査報告書

昭和56年3月25日 印刷
昭和56年3月31日 発行
発行 山形県教育委員会
印刷 大風印刷
